

田楽辻子周辺遺跡 (No. 33)

浄明寺一丁目 590 番 2 地点

例 言

1. 本報告は、鎌倉市浄明寺一丁目 590 番 2 において実施した、田楽辻子周辺遺跡（鎌倉市 No. 33）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 30 年 2 月 16 日から同年 4 月 26 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。調査の対象面積は、41.06 m²である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。
調査担当者 押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
調査員 岡本夏菜、神田倫子、渡邊美佐子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
作業員 鯉沼 稔、吉澤 功、寺尾征夫、星 栄人、遠藤雅廣、松澤和通
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター 文化財班)
整理作業参加者 押木弘己、神田倫子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
4. 本報告の作成は、以下の分担で行った。
本文執筆・編集 押木
遺物実測・挿図作成 神田
遺構挿図・写真図版作成、遺物撮影・写真図版作成、遺物観察表・カウント表作成 押木
5. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「D Z 1 7 0 5」とし、出土品への注記などに使用した。

凡 例

1. 挿図の縮尺は、遺構・遺物ともに図中に表示している。
2. 本書中に記載した国土座標値は、世界測地系（第IX系：東日本大震災後の補正前）に基づいている。
3. 挿図に示した方位標は座標北（Y軸）で、真北はこれより 0° 09′ 25″ ほど東に振れている。
4. 遺構挿図中の水系高は、海拔値を示す。
5. 出土遺物の年代観は以下の文献を参考としたが、筆者が各所見を理解し切れていない部分もある。
 - ◆かわらけ・遺物全体の様相：宗墓秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
 - ◆輸入陶磁器：『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一』太宰府市教育委員会 2000
 - ◆瀬戸窯製品：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
 - ◆常滑・渥美窯製品：『愛知県史』別編窯業 3 中世・近世常滑系 愛知県 2012
 - ◆瓦質土器：河野眞知郎 1993「中世鎌倉火鉢考—東国との関連において—」
『考古論叢神奈河』第2集 神奈川県考古学会

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	
第1節 遺跡の立地	425
第2節 周辺の調査成果	425
第二章 調査の方法と経過	
第1節 調査に至る経緯	427
第2節 調査の方法	429
第3節 調査の経過	429
第三章 基本土層	429
第四章 検出遺構と出土遺物	
第1節 検出遺構	431
第2節 出土遺物	443
第五章 調査成果のまとめ	
第1節 遺構の年代観と変遷	450
第2節 5a面の玉石敷きについて	451

挿図目次

図1 調査地点の位置	426	図8 5a面全体図	436
図2 国土座標移動図および調査区配置図	428	図9 5b面全体図	438
図3 土層断面図	430	図10 6面全体図	440
図4 1面全体図	432	図11 6面下全体図	441
図5 2面全体図	433	図12 出土遺物(1)	442
図6 3面全体図	434	図13 出土遺物(2)	443
図7 4面全体図	435		

表目次

表1 田楽辻子周辺遺跡の調査地点	426	表3 出土遺物カウント・計量表	446～449
表2 出土遺物観察表	444・445		

写真図版目次

図版1	8. I区4面 全景(西から)
1. 現地調査前(北東から)	図版2
2. I区 表土掘削状況(北西から)	1. I区4面 土坑1(西から)
3. I区 作業風景(東から)	2. I区4面 土坑1断面(南から)
4. I区1面 全景(西から)	3. I区5面 土坑1(5面時、北から)
5. I区2面 全景(西から)	4. I区5面 全景(西から)
6. I区2面 南東隅遺物出土状況(西から)	5. I区5面 礎石(東から)
7. I区3面 全景(西から)	6. I区5面 切石列(北から)

7. I区6面 全景（西から）

8. I区6面上 炭層範囲（北から）

図版3

1. I区6面調査時 2面の落ち込み（北から）

2. I区6面下 全景（西から）

3. I区西壁 土層断面（東から）

4. I区東壁 土層断面（北西から）

5. I区南壁 土層断面（北東から）

6. I区北壁 土層断面（南西から）

7. I区北東隅 6面下遺物出土状況（南から）

8. I区6面下トレンチ東壁土層断面（西から）

図版4

1. II区1面 全景（西から）

2. II区2面 全景（西から）

3. II区3面 全景（西から）

4. II区4面 全景（検出時、西から）

5. II区4面上 遺物出土状況（西から）

6. II区4面 全景（割れ石等除去後、西から）

7. II区 作業風景（南西から）

図版5

1. II区5a面 全景（西から）

2. II区5a面 玉砂利敷き面（北西から）

図版6

1. II区5b面 全景（炭層検出時、西から）

2. II区5b面 全景（西から）

図版7

1. II区5a面 柱穴列（6面調査時、北西から）

2. II区6面 全景（西から）

図版8

1. II区5b面 北側切石列落ち込み状況
（6面調査時、北から）

2. II区6面下 全景（岩盤検出時、西から）

図版9

1. II区5b面下～6面 土坑1 常滑甕片
（南西から）

2. 同上、土層断面（南から）

3. II区6面下 岩盤以北（東から）

4. II区西壁 土層断面（北東から）

5. II区東壁 土層断面（西から）

6. II区西部南壁 土層断面（北から）

7. II区東部南壁 土層断面（北から）

図版10 出土遺物

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

本調査地は鎌倉市浄明寺一丁目590番2に所在する。滑川左岸に所在し、樹枝状に開かれた丘陵谷戸のひとつ「釈迦堂ヶ谷」の開口部付近に立地する(図1)。この一帯では、滑川は大きく蛇行しながら西に流れ、これを挟み込む格好で二本の東西道が走っている。北側は県道204号(金沢・鎌倉線)で、中世の史料には「六浦道」の名で登場する。南側は「田楽辻子のみち」と呼ばれる市道である。本地点は「田楽辻子のみち」の南側で、釈迦堂ヶ谷の奥へ向かう南北道との三叉路に面している。現地表面の標高は15.5m前後を測り、北と西に向けてなだらかに下がる立地条件にある。

遺跡名にもなっている「田楽辻子」は『吾妻鏡』嘉禄三年(1227)正月二日条や正嘉元年(1257)十一月二十二日条の火災記事に登場し、鎌倉時代まで遡る道路名称であったことが分かる。この近辺に田楽師の住居があったことが名前の由来とされ、筋違橋から宝戒寺橋付近を経て、滑川左岸の丘陵裾に沿って宅間ヶ谷辺りで六浦道に繋がったものと考証されている(高柳1959)。上掲の火災記事からは、この一帯に幕府御家人以下、多くの人家が軒を連ねていた様子が窺い知れる。将軍御所をはじめ幕府の枢要施設にも近いことから、谷戸内の好立地から順に、切土・盛り土造成によって平坦地を広げながら屋地を拡大していった様子が推察できよう。

この近辺では、滑川の両岸で樹枝状に開けた谷戸が数多く存在するが、左岸では東から順に宅間ヶ谷、犬懸ヶ谷、釈迦堂ヶ谷、大御堂ヶ谷が間口・奥行きともに大きく、歴史的由来も比較的つかめている。前二者は南北朝・室町期の関東管領上杉氏四家のうち宅間・犬懸家がそれぞれ居を構えていたという。宅間ヶ谷には建武元年(1334)の開創と伝わる功臣山報国寺が残る。開山は足利家時とも上杉重兼とも伝える。犬懸上杉氏では、「犬懸入道」と呼ばれ禅秀の乱(応永二十三年=1416)で滅ぼされた氏憲が有名である。釈迦堂ヶ谷は北条泰時が父義時追福のため嘉禄元年(1225)に建立した釈迦堂に由来する。大御堂ヶ谷は源頼朝が父義朝の菩提を弔うため文治元年(1185)に建立した勝長寿院の俗称「大御堂」が由来とされる。同寺は鶴岡八幡宮寺・永福寺と並び称される三大寺院であり、三代将軍源実朝の死後、彼の墓や、その母である北条政子の新造御所も設けられたというが、これまで本格的な発掘調査は殆どなされてこず、史料上に登場する主要堂宇の配置や変遷など、具体的様相は全くつかめていない。

第2節 周辺の調査成果

田楽辻子周辺遺跡は滑川の左岸、ほぼ現行の流路に沿って東西長750m、南北幅150mで展開する。現在までに11地点で発掘調査が実施されているが、図1が示すように各地点が分散しており、小規模な調査が占めていることから、遺跡全体の性格や、土地利用の変遷を考察できるだけの材料は得られていない。「田楽辻子」に沿った地点1・3は「田楽辻子」の南に接しており、ともに現行道路と並行する15世紀代の道路遺構が検出されている。地点1の道路遺構は大よそ13世紀の中頃以降、6回の改修を経ていたことが指摘され、道筋や規模の変動は経つつも「田楽辻子」の前身といえる東西道が鎌倉時代には存在していたことが明らかとなった。上述した勝長寿院や釈迦堂など、鎌倉時代前半の創建寺院を擁した谷戸が当地域に並ぶことを傍証とすれば、これらを結ぶ交通路が早くから整備されたことは十分

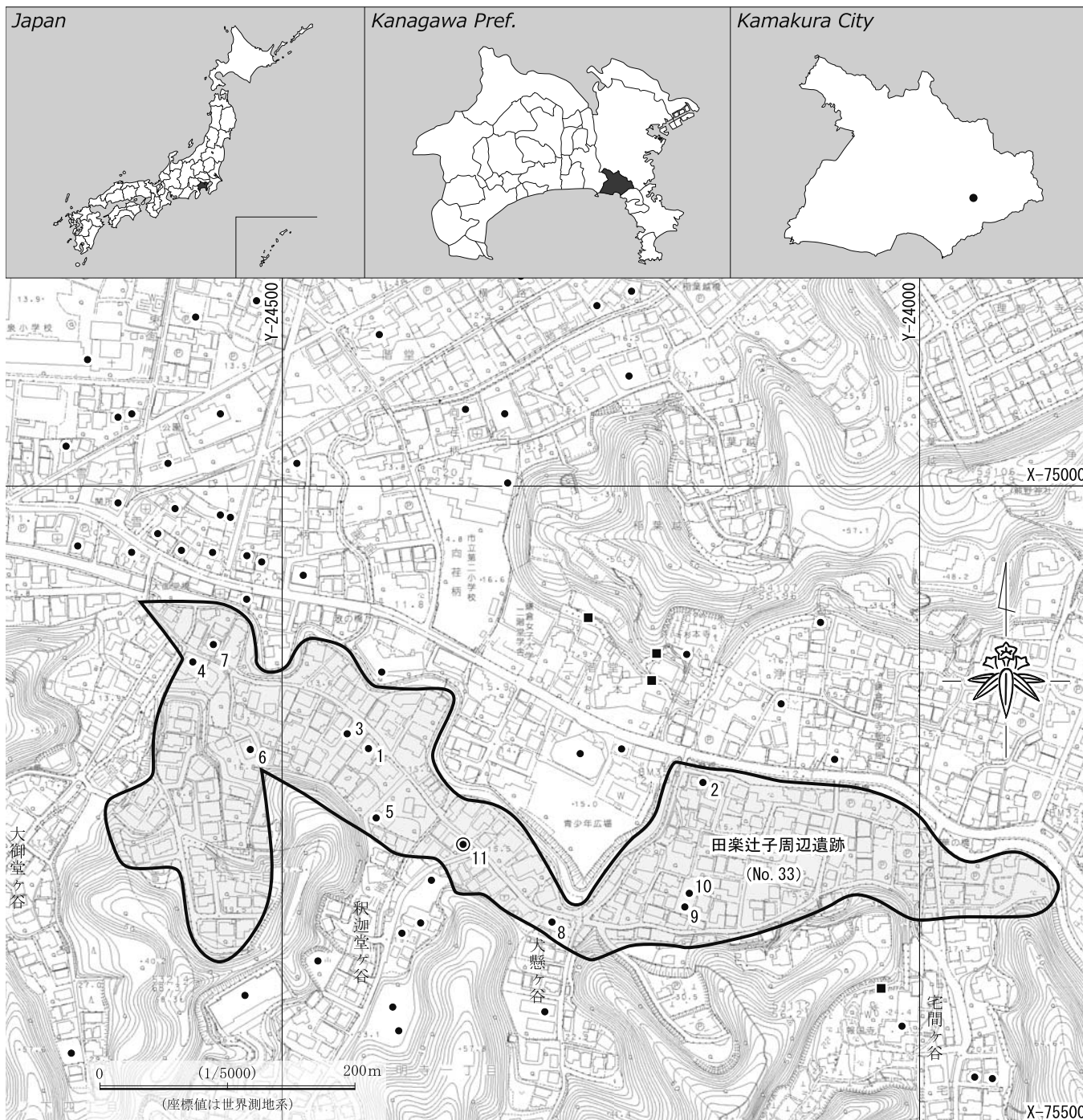


図1 調査地点の位置（鎌倉市発行 1:2,500 都市計画基本図を使用・改変）

表1 田楽辻子周辺遺跡の調査地点（番号は図1に対応）

No.	地番	調査年度	面積 (㎡)	所収文献
1	浄明寺字釈迦堂 658 番	1989 年度	150	『釈迦堂田楽辻子遺跡』釈迦堂田楽辻子遺跡発掘調査団 手塚直樹 他 1990
2	浄明寺字宅間 562 番 33	1990 年度	19	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8』鎌倉市教育委員会 大上周三 1992
3	浄明寺一丁目 661 番 1	1998 年度	254	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会 森 孝子 2000
4	雪ノ下五丁目 555 番	1999 年度	51	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22 (第 1 分冊)』鎌倉市教育委員会 福田 誠 2006
5	浄明寺一丁目 652 番 8	2008 年度	67	『第 19 回鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』NPO 法人鎌倉考古学研究所 森 孝子 2009
6	浄明寺一丁目 676 番 1	2008 年度	105	『田楽辻子周辺遺跡発掘調査報告書』(有) 鎌倉遺跡調査会 齋木秀雄 他 2012
7	浄明寺一丁目 556 番 6 外	2009 年度	39	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会 押木弘己 2012
8	浄明寺一丁目 691 番 4	2010 年度	54	—
9	浄明寺二丁目 569 番 14	2012 年度	50	—
10	浄明寺二丁目 569 番 10	2012 年度	59	『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30 (第 2 分冊)』鎌倉市教育委員会 根本志保 2014
11	浄明寺一丁目 590 番 2	2017 年度	41.06	本報告

に考えられる。

丘陵裾に接した地点5では、鎌倉時代前期から南北朝時代にかかる9枚の遺構面が検出されている。13世紀中頃～後半に比定される第6面～第3面は、屋敷地の中心部といった性格が想定されている。第4面では雨落ち溝状の方形区画内に礎石建物が建ち、区画外には貝殻粒を含む白色砂が厚く敷かれていた。続く第3面ではL字形の溝で仕切られた土地利用の痕が見て取れ、調査区の西半部では白色砂や玉砂利を敷いた整地面が検出されている。後述するように、本地点の第5面の整地状況と近似しており、帰属年代も概ね一致するようである。

地点6は、釈迦堂ヶ谷と大御堂ヶ谷とに挟まれた小谷戸内に立地する。13世紀第1四半期～15世紀中頃の間で5枚の遺構面が確認され、下層の5・4面では南北道路が調査区を斜めに貫き、3面以降は掘立柱や礎石建物が展開するようになって土地利用の形態が変化する。最下層の5面から瓦の出土量が多く、完形の平瓦など残存度の高い資料も一定量見られる。5面では永福寺創建期（Ⅰ期）瓦が占め、4面以降に同Ⅱ期瓦が認められる。少量ながら軒瓦も出土しており、部分的ではあったとしても瓦葺き建物が谷戸内に存在していた可能性は十分に想定でき、13世紀第1四半期という5面の年代観と併せ、西隣の谷戸に展開した勝長寿院との関係が注目される。

先述したように遺跡地全体の性格までは見通せないが、概して13世紀前半～15世紀中頃まで盛り土整地を繰り返した土地利用が続き、13世紀後半には区画の改変も含め、土地利用の在り方が変化する傾向を見出せる。浄明寺地区は南北朝・室町時代において鎌倉公方の御所や関東管領上杉氏の邸宅など政治の枢要が集中するエリアであった。こうした政治秩序の崩壊をもって中世都市としての鎌倉も終焉を迎えることになるが、発掘成果による遺跡変遷の傾向からも、この間の動向を垣間見ることができる。

参考文献（表1掲載分以外）

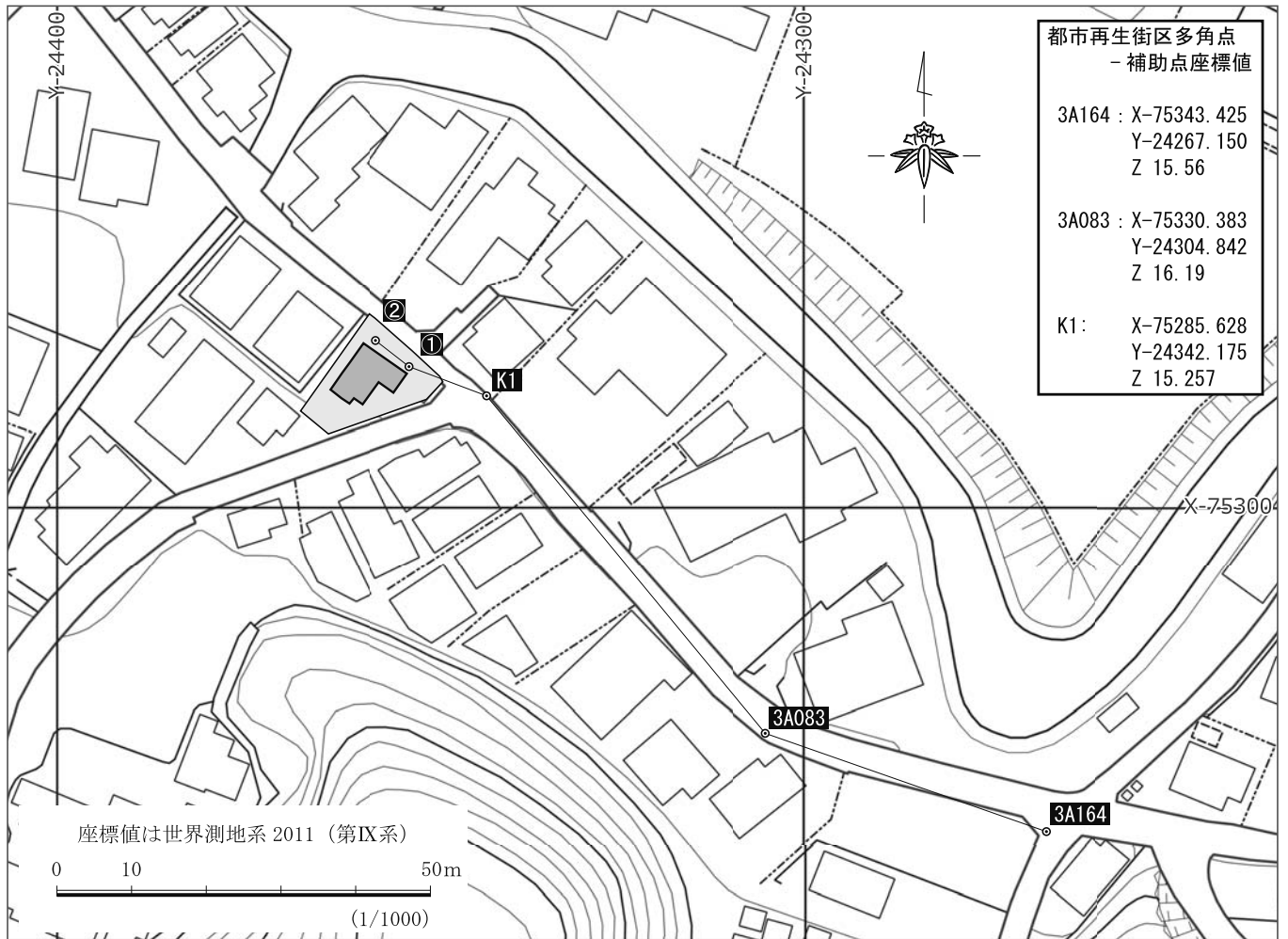
- 高柳光寿 1959 『鎌倉市史 総説編』 鎌倉市史編纂委員会編 吉川弘文館
白井永二編 1976 『鎌倉事典』 東京堂出版
貫 達人・川副武胤 1980 『鎌倉廃寺事典』 有隣堂

第二章 調査の方法と経過

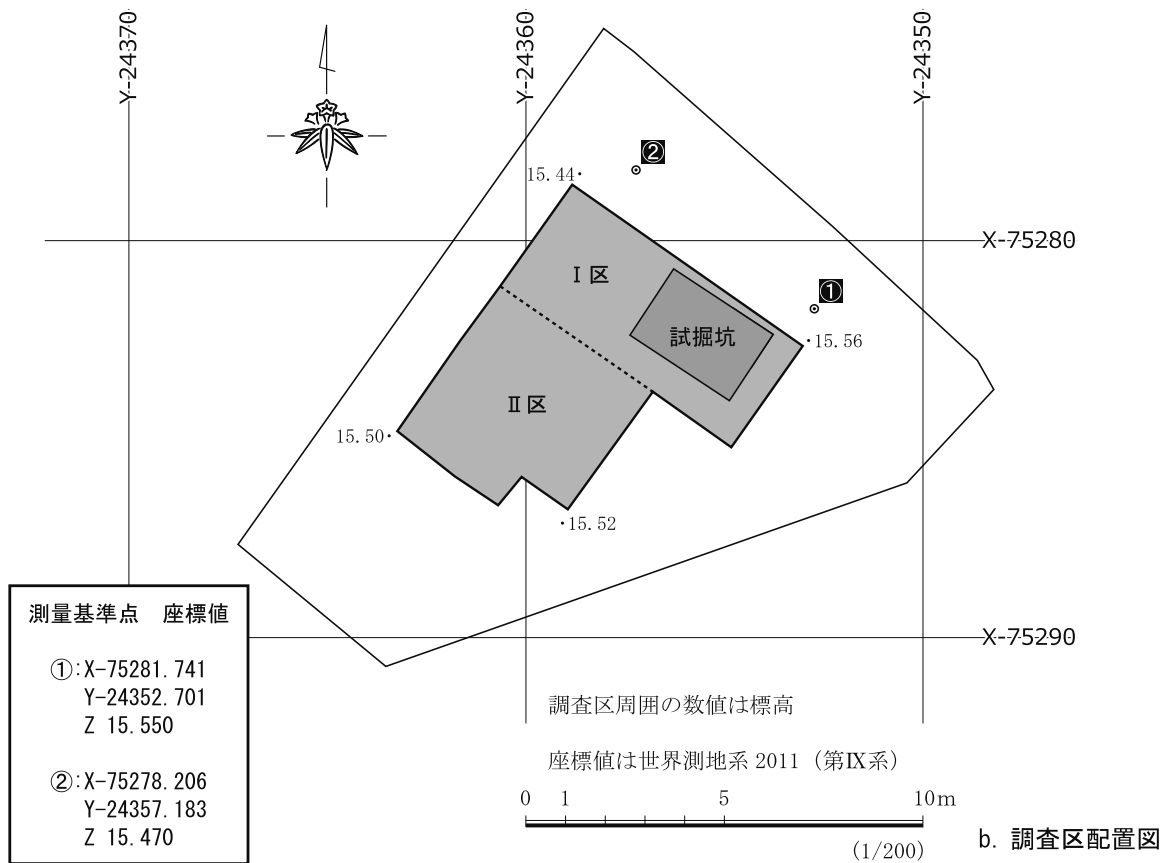
第1節 調査の経緯と経過

本発掘調査は個人専用住宅の建設工事に先立つ埋蔵文化財の記録保存調査として、鎌倉市教育委員会文化財課（市教委）が実施した。建設計画では基礎工事として最大深度6.75mの地盤改良（柱状改良）を行う設計であったことから、市教委では平成29年7月12・13日に確認調査を実施し、地表下206cmまでの間に中世の遺物包含層ないし整地面を少なくとも5枚程度確認した。この結果を受け、建設計画の実施に当たっては、事前に本格的な発掘調査を行う必要があるという判断に至った。

発掘調査は平成30年2月16日に工事範囲北半部（Ⅰ区）から着手し、3月26日から南半部（Ⅱ区）に移行した後、4月26日にはⅡ区の埋め戻しと調査器材の撤収を行って現地での全作業工程を終えた。出土品・記録類の整理作業と報告書の作成業務には即座に着手し、文化財課分室で約2ヶ月間従事した。



a. 国土座標移動図



b. 調査区配置図

図2 国土座標移動図および調査区配置図

第2節 調査の方法

今回の発掘調査は土壌改良の施工範囲を対象としたが、安全面を配慮して隣地や道路との境界線から十分な距離を取ったため、調査面積は当初予定の51 m²から、最終的には41.06 m²まで減少した。

掘削にともなう発生土置き場を確保するため調査区は2分割し、Ⅰ区（北半部）→Ⅱ区（南半部）の順に着手した（図2-b）。Ⅰ・Ⅱ区とも地表から40cmまでは重機で掘り下げ、以下は人力による掘削に移行した。地表面から1.5 m程の深さで中世の基盤層に達し、これ以下は土層の堆積状況を把握すべく調査範囲を狭めて掘削を行った。地表面から2 mの深さに達したところで掘削を終え、写真・測量図といった記録類の作成に移行した。測量には国家座標系（JGD2011）基準軸を用いることとし、市道上に打設された都市再生街区多角点（補助点）2点間の関係を起点に、開放トラバース測量によって調査地の敷地内に基準点を移設した。この時、標高（垂直座標）も併せて移設した（図2-a）。

第三章 基本土層

図3には、調査区壁の土層断面図を掲げた。今回の調査では大きく6枚の中世遺構面を確認したが、最上面の1面は表土を除去した後の中世遺物包含層の上面で、削平を受けた可能性も高く、生活面とは言い難い。最下面となる6面より下位では明確な整地層は認められなかったが、自然要因と考えられる斜面状堆積土の中から弥生時代～中世の遺物が出土している。器壁の厚い手づくねかわらけが含まれるので、6面の構築開始期を13世紀第2四半期～中頃に比定する材料となる。6面以降では、破碎泥岩を盛り土した嵩上げ整地が繰り返され、3面と2面の整地に際しては大型の泥岩ブロックが積み上げられており、特に2面は乱雑な整地によるものであった。5面と4面は3面よりも丁寧な整地状況であったので、4面以降、3面構築までの間に土地利用上の画期があった可能性を指摘できる。

6面整地層を取り除いて掘り下げを進めた結果、Ⅱ区の南半部では地表下170 cm前後で岩盤面が検出された。部分的にはあるが、岩盤面上では中世基盤層に当たる黒褐色土の堆積も確認できた。岩盤は北西～南東方向のラインを縁辺として、60～70°という急斜度で北東に向けて落ち込む。地表下200cmまで斜面を追って掘り下げたものの、岩盤面の底を確認するには至らなかった。落ち込み内には黄灰色の砂質土と粘質土が交互に堆積し、北西に落ち込む斜面状堆積を呈していた。上述のように弥生時代～鎌倉時代前半期の遺物片が混在しており、谷戸の上方などから土砂の移動によってもたらされたものと考えられる。また、堆積土の粒子が比較的緻密であることから、基本的には水流にともなう浸食・堆積を繰り返した結果の埋没土と考えている。岩盤の落ち込みについては確実な根拠はないが、人工の開削ではなく、地滑りなど自然要因による所産という印象を持っている。

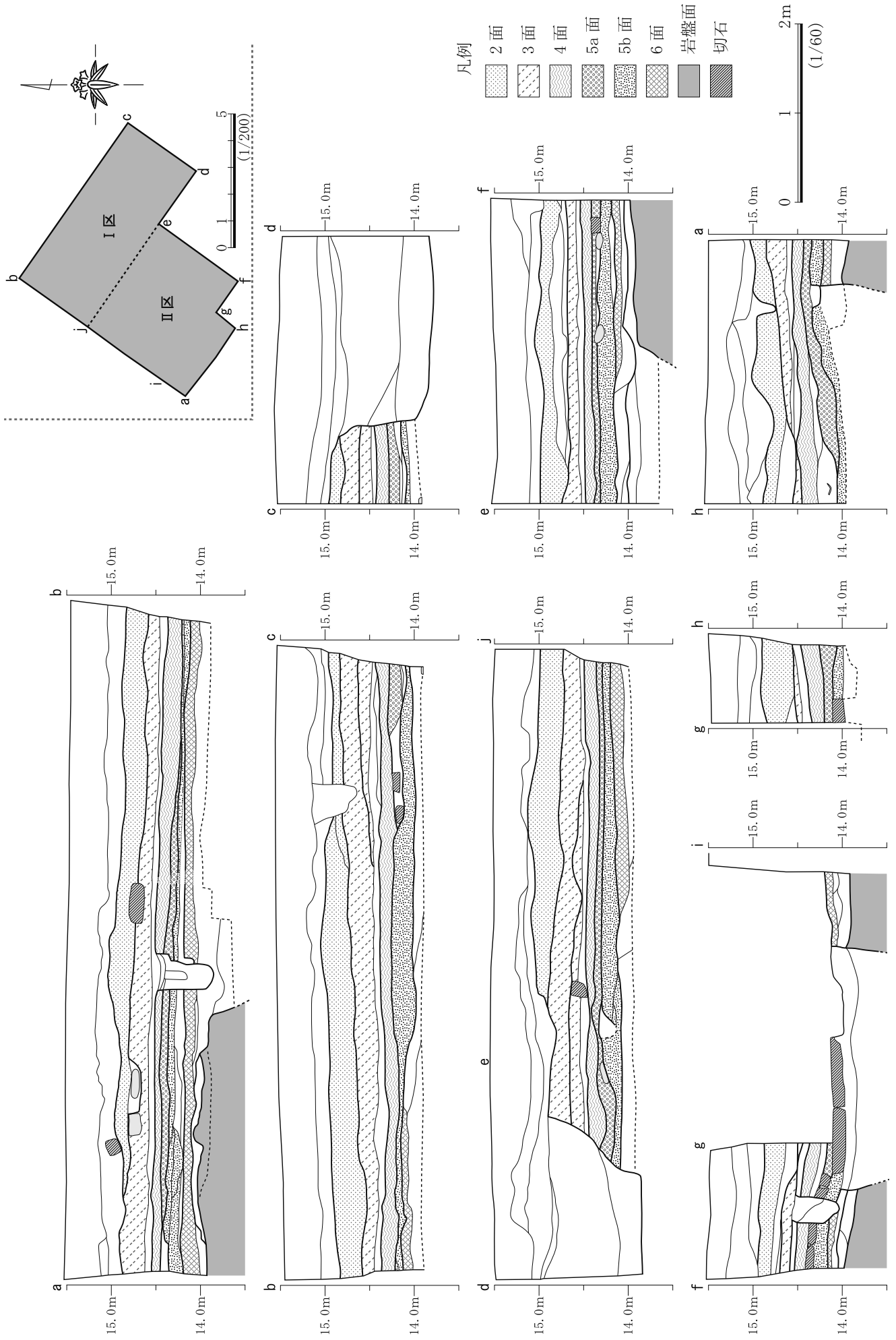


图3 土层断面图

第四章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

(1) 1面の遺構（図4）

1面は地表下30～40cmの標高15.0～15.1m前後で確認した。表土と近世以降の耕作土を除去したところでの確認となったが、耕作土を埋土とする浅い落ち込み以外は明確な遺構を確認できなかった。現地では整地面として記録をとったが、実際のところは中世遺物包含層を検出したに過ぎないと考えている。

(2) 2面の遺構（図5）

地表下70～80cmの標高14.8～15.0m前後で確認された。泥岩ブロックを埋め立てた粗い整地層を構築しており、上面の整形は雑で凹凸が著しかった。I区東端部では深さ1m程度の竪穴状遺構を検出したが、平面的に竪穴と認識できたのは6面調査時のことで、2～5面では埋土のレンズ状堆積を土坑と判断して記録を取っていた。調査区壁の断面観察により、これら土坑も含めて2面から掘り込まれた竪穴状遺構であったことを確認した。II区南半部では整地面の上面が20cmほど落ち込む箇所が見られたが、これは下層（6面）井戸廃絶後の埋め立てが不十分であったことによる、陥没の影響と見ている。

竪穴状遺構は東と南が調査区外に続くため全体規模は把握できなかった。検出できた範囲では、東西1.5m以上、南北2.6m以上を測り、深さは最大で1.1mを計測した。底面は平坦であり、方形基調を呈することから、2面上での掘り込み形態も方形状に復元した。埋土は上下2層に大別でき、上位2/3までは泥岩ブロックを主体に埋め立てられた感があり、下位1/3は暗灰色粘質土が堆積しており経時的埋没を想起させる状況であった。

(3) 3面の遺構（図6）

地表下80～100cmの標高14.6～14.9m前後で確認された。II区側については、本来の整地面上面より低いレベルまで掘り下げての検出となってしまった。断面観察により、北→南と東→西に緩やかに下がる生活面であったことが確認されている。比較的丁寧な整地面であったが、ここを掘り込む遺構は非常に少なく、調査区の西壁際で整地層に埋め込まれた凝灰岩切石（鎌倉石）と、浅い掘り込みの底に安山岩を据えた2例を検出できたに過ぎない。両者は石材こそ異なるが天端レベルが14.8m弱で同じである、また4面以下の遺構軸線とも近似した配置状況と見なせることから、この2基を西辺とする礎石建物が展開していた可能性も指摘できる。

(4) 4面（図7）

地表下100～120cmの標高14.3～14.5mで確認された。3面整地層との間に軟弱な粘質土の薄層を挟むが、断面観察ではこれを掘り込んで3面の整地土にパックされるピットが確認できたため、薄層も4面存続時に堆積したものと考えた。比較的丁寧な整地面として確認できたものの、現地調査時はI区で確認された土坑1のみを明確な掘り込みを持つ4面遺構として把握したに留まったが、その後の土層断面の検討により、5面調査時に検出された建物柱穴などを4面に帰属させ得るものと判断した。写真図版1-8、4-4・6などに遺構が殆ど写り込んでいないのも、そのためである。

土坑1はI区の北東部で検出された。直径120cmほどの円筒形土坑で、確認面から90cmほどの標高13.47m前後まで掘削したものの、底面の確認には至らなかった。深度および断面形状から見て、井戸

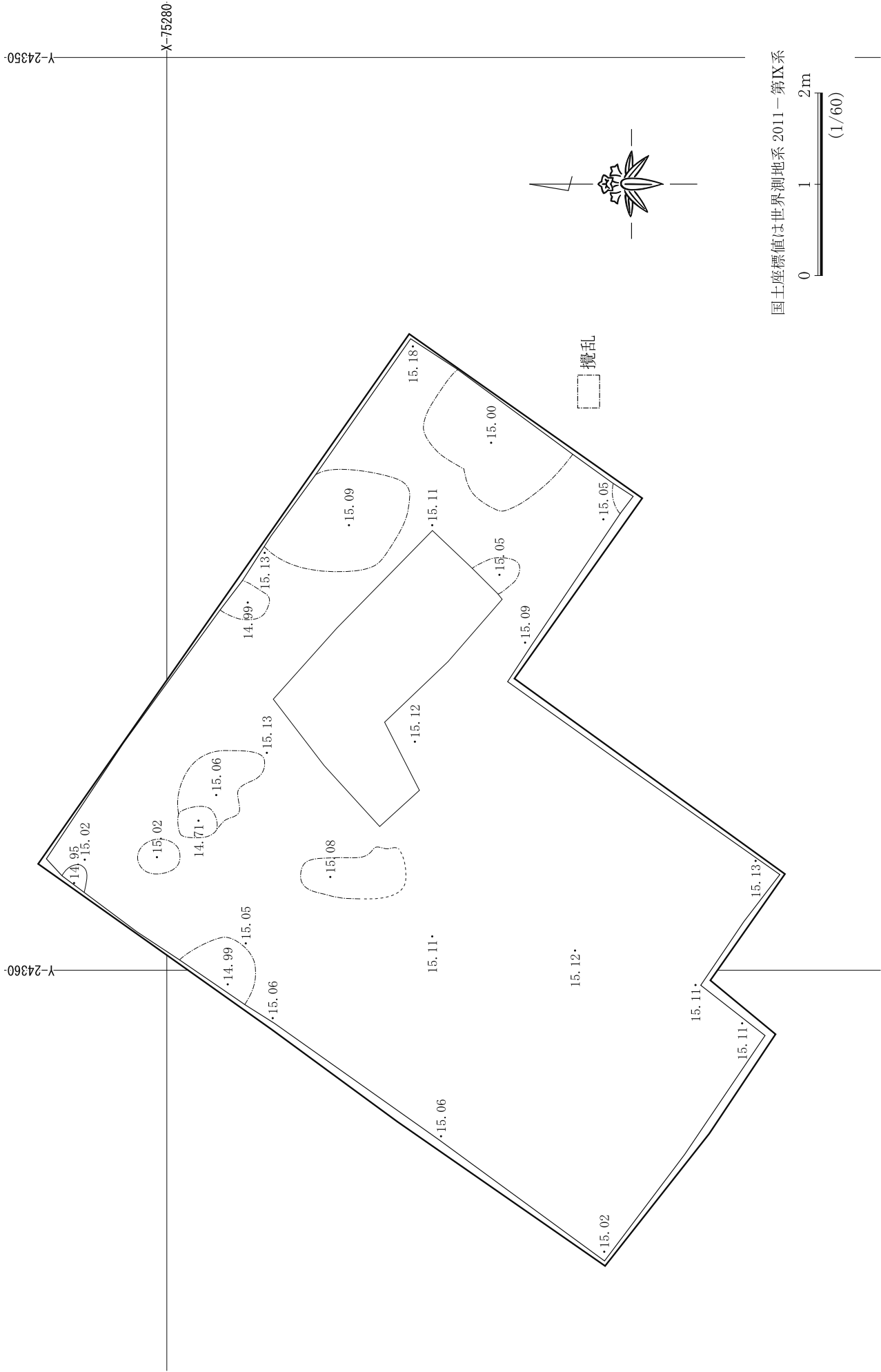


图 4 1面全体图

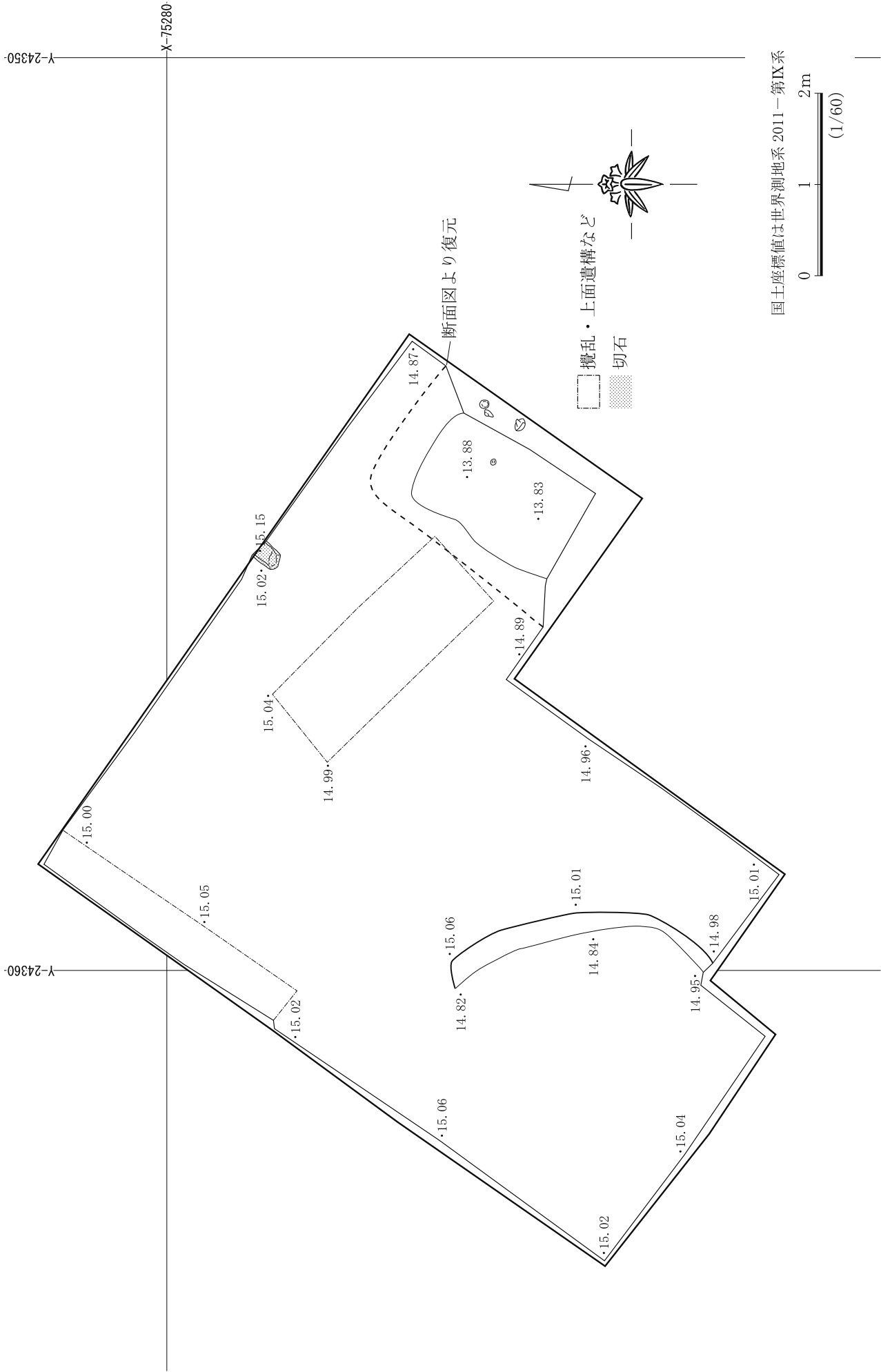


図5 2面全体図

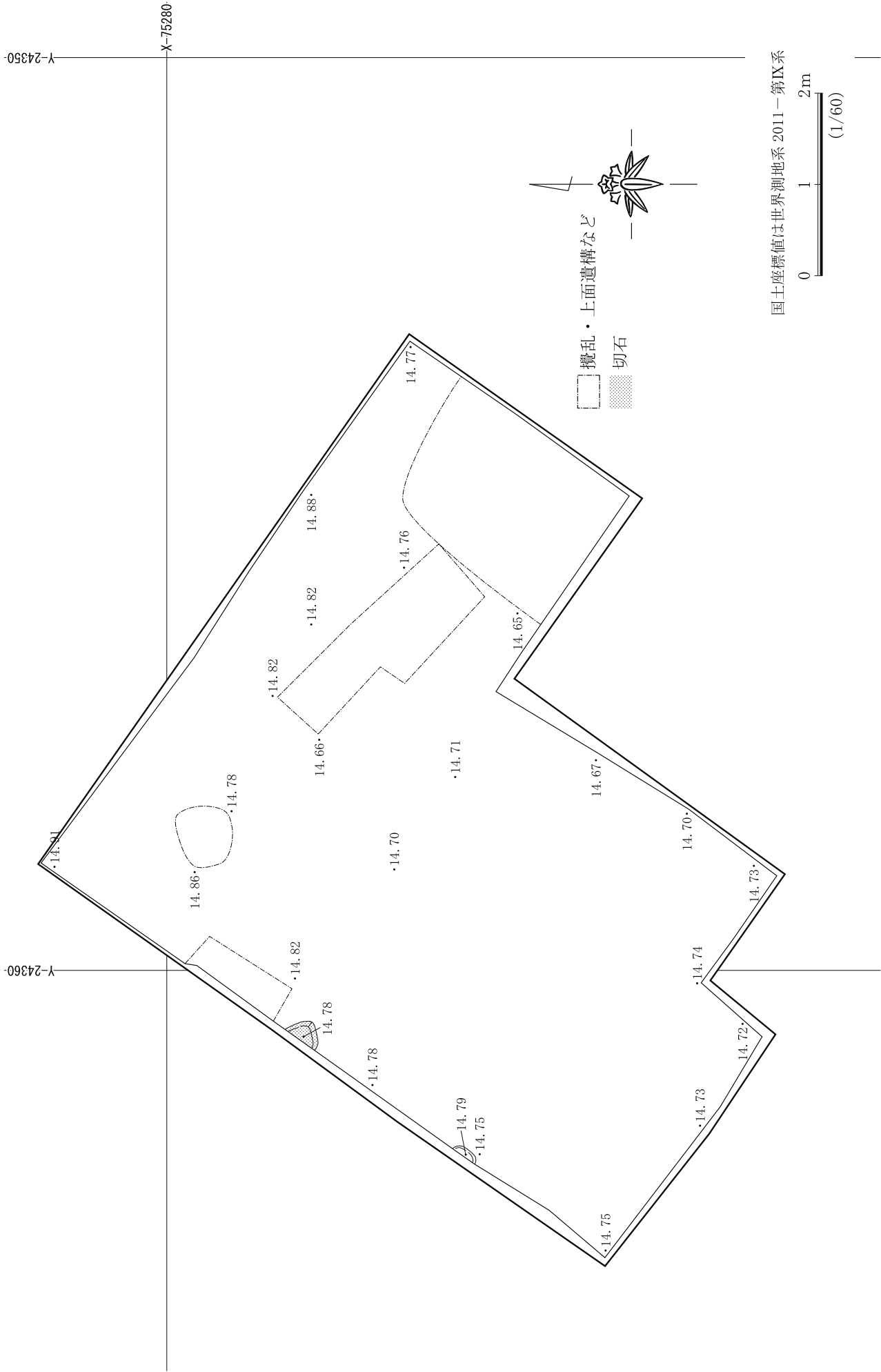


図6 3面全体図

であった可能性が高い。円筒形土坑の内部は大型の泥岩ブロックで埋め戻されていたが、ブロック間の隙間が多く乱雑な印象を受けた。この上位では1面の段階から攪乱穴が見つかったが、これは1面から掘り込まれたものと考えるよりも、本土坑の埋め立てが粗雑であったために後世になって陥没した結果と解釈する方が妥当であろう。円筒形土坑の外周にはキメ細かい灰色粘土が貼り付き、これを取り除いたところで平面130cm四方の掘り方となることが確認できた。

この他、I区～II区に跨る格好で掘立柱建物1棟が検出された。東西2間以上×南北1間を確認した。柱間距離は東西・南北とも200cmで、柱穴の深さは確認面から50～70cmを測る。東西柱穴列の中心軸は、N48°Wを指す。一部柱穴の埋土上層には安山岩礫が落ち込んでおり、柱穴並びの延長線上近くに深さ10cm程度の浅い落ち込みが点在する状況が見られたため、掘立柱建物の廃絶後、これを拡張する形で礎石建物へと建て替えられたことも、可能性としては低い指摘しておきたい。

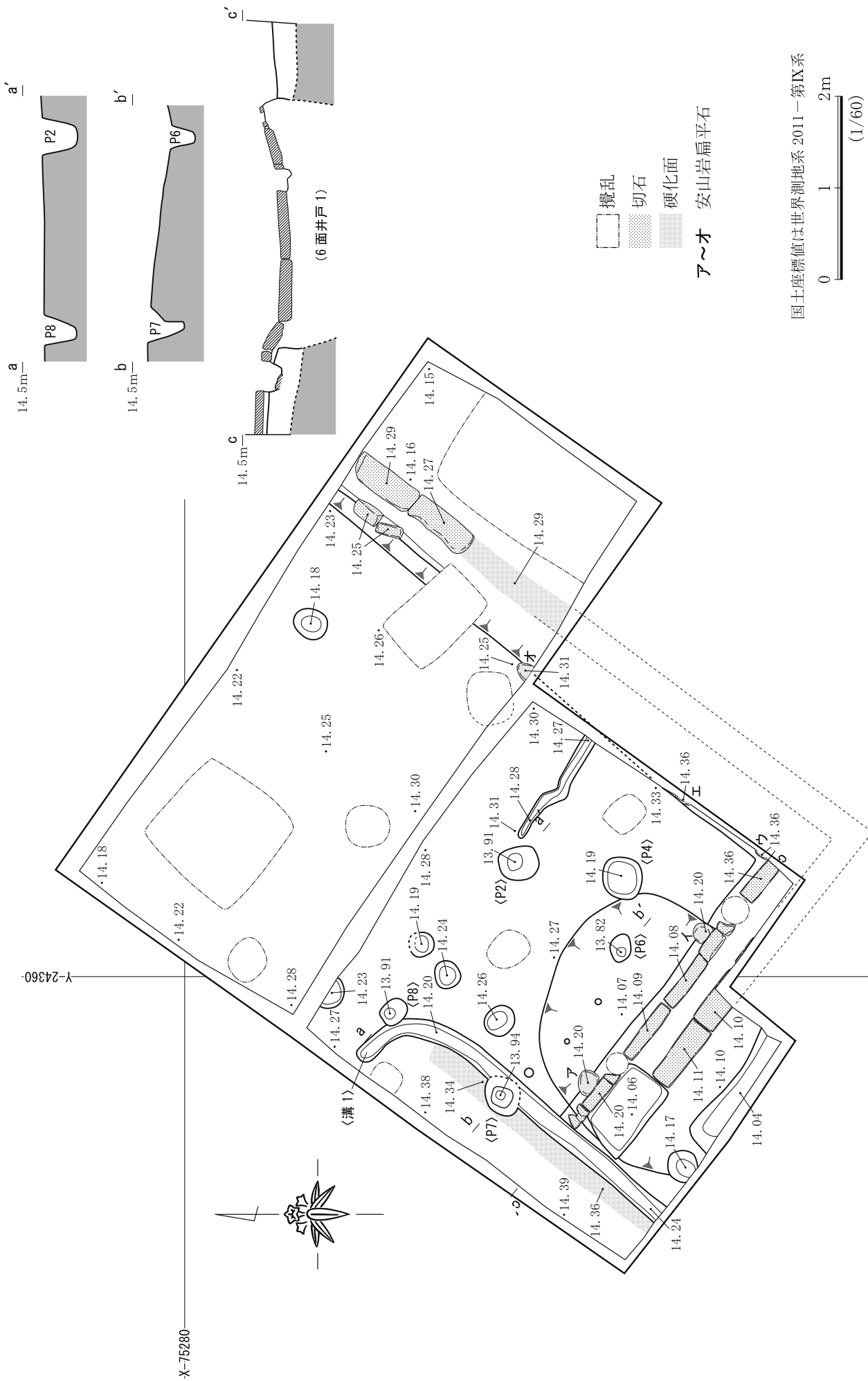
(5) 5面 (図8・9)

上・下層で2枚に分かれ、上層を5a面、下層を5b面とした。

5a面は地表下110～130cmの標高14.2～14.4m前後で確認された。玉砂利敷きの整地面で、II区のほぼ全域で確認された。玉石は径2～5cm程度の円礫が用いられ、正確な同定は行っていないが安山岩や硬質砂岩などが主体になるものと思われる。密度は北に向かうに連れて希薄となり、II区北辺部以北とII区西辺部では確認できなかった。II区の南半部では平面が円形で浅いすり鉢状を呈する窪地が確認され、この部分にも玉石が敷かれた上に、薄い砂層が堆積していた。調査当初、窪地を池などと考えて洲浜様の造作が施されたものと想像したが、後に6面まで掘り下げるに及び、6面井戸の埋め立て土が後世に陥没した際、5a面の石敷き面も、その影響で大きく落ち込んだ事実が判明した。

玉石敷き層は厚いところでは10cmを測り、これを全て除去すると薄い炭層の堆積が見られ、さらにこれを除去した14.15～14.35m前後で、泥岩粒により丁寧に整えられた5b面を検出した。5b面ではI区の東辺部とII区南辺部で凝灰岩切石(鎌倉石)を直列に並べた区画遺構を検出した。未調査部分を含むが、両調査区の切石列は図9で示したように直角に屈曲して繋がるものと考えられる。I区・II区ともに各々2条の石列が並行して検出されたが、I区では西側、II区では北側と、屈曲の内区側となる切石のサイズが小さかった。同規格の切石を用いていないことと、残存状態が良好なII区切石列は大小2列ともに整形面を南西辺に揃えるように配置されていたことから、両者が一対となる溝の護岸石ではなく、初期に小型の切石を並べて外縁としていたところを、次段階にはこれを「埋め殺して」その外側に大型の切石を並べ直したものと考えた。つまり、大小2列の切石列は時期差を有し、一定区画の東辺と南辺を区切る縁石であったと理解したい。南辺(II区側)の延伸ラインは新・旧両段階ともN52°Wを指し、本地点北側の市道と近似した軸線を取る。

旧段階(内区側)の切石列では幅15cm×厚さ10cmで長さ40～70cmの切石が、新段階(外区側)の切石列では幅30×厚さ12cmで長さ75～80cmの切石が用いられていた。両段階とも各所で切石が取り外されており、I区新段階(東側)では荷重による硬化面となって切石の痕跡が残され、II区新切石列では切石1個分のサイズより一回り大きい抜き取り穴が確認された。I・II区ともに旧切石列の内区側で掘り方となる落ち込みが確認されたが、このライン上の数ヶ所において、切石に接する形で安山岩の扁平石が据えられていた。II区南西角では100～110cmの間隔でL字形に屈曲する並びが見られ、他の遺存する石も併せて平均的な距離を算出すると、本来は約105cmスパンで配置されていたと見られる。下層井戸の影響による陥没箇所を除いた扁平石の上面レベルは14.31～14.36mを測り、遺構面全体の高低差に準じて推移する。機能・用途として、切石の固定や地覆木材の基礎などが考えられる。



国土座標値は世界測地系 2011 - 第Ⅸ系

図9 5b面全体図

Ⅱ区の西辺部近くでは、両段階の切石列西端を途切れさせる格好で、これと直交する小規模な溝1が検出された。南は調査区外に延び、北側は西に90°カーブして途切れ、調査範囲内では南北3.6mの長さまで確認できた。上幅25cm、底幅は15～20cmを測り、確認面からの深さは10cm程で底面標高は14.20～14.25m前後を測る。南北の延伸方向は、N40°Eを指す。南北溝部分では、溝の西縁に沿って20cm幅の硬化面が続いており、ここにも切石列が配置されていた可能性が高い。溝1の以西は、5a面において玉石敷きが希薄であったエリアとも重なることから、溝1とこれに付帯したであろう切石列は雨落ち溝や縁石といった建物区画（基壇の可能性も）に関連する遺構で、玉石敷きはその東側に広がる庭的空間の演出装置として整えられた可能性も想定できる。よって、溝1関連遺構は、後述のピット列とともに5a面に帰属させ得るかもしれない。

溝1と西縁の硬化面を切るピット7はピット2・6・8とともに1組の掘立柱建物または柱穴列として復元できた。東西1間（200cm）×南北1間（150cm）まで確認でき、東西へはさらに延伸する可能性がある。

(6) 6面（図10）

6面は地表下120～150cmの標高14.0～14.3m前後で確認された。灰色粘質土を緻密・堅固に突き固めて整地されていた。Ⅱ区の南半部で井戸と見られる方形の落ち込みが検出された他、土坑・ピット各1基が検出された。

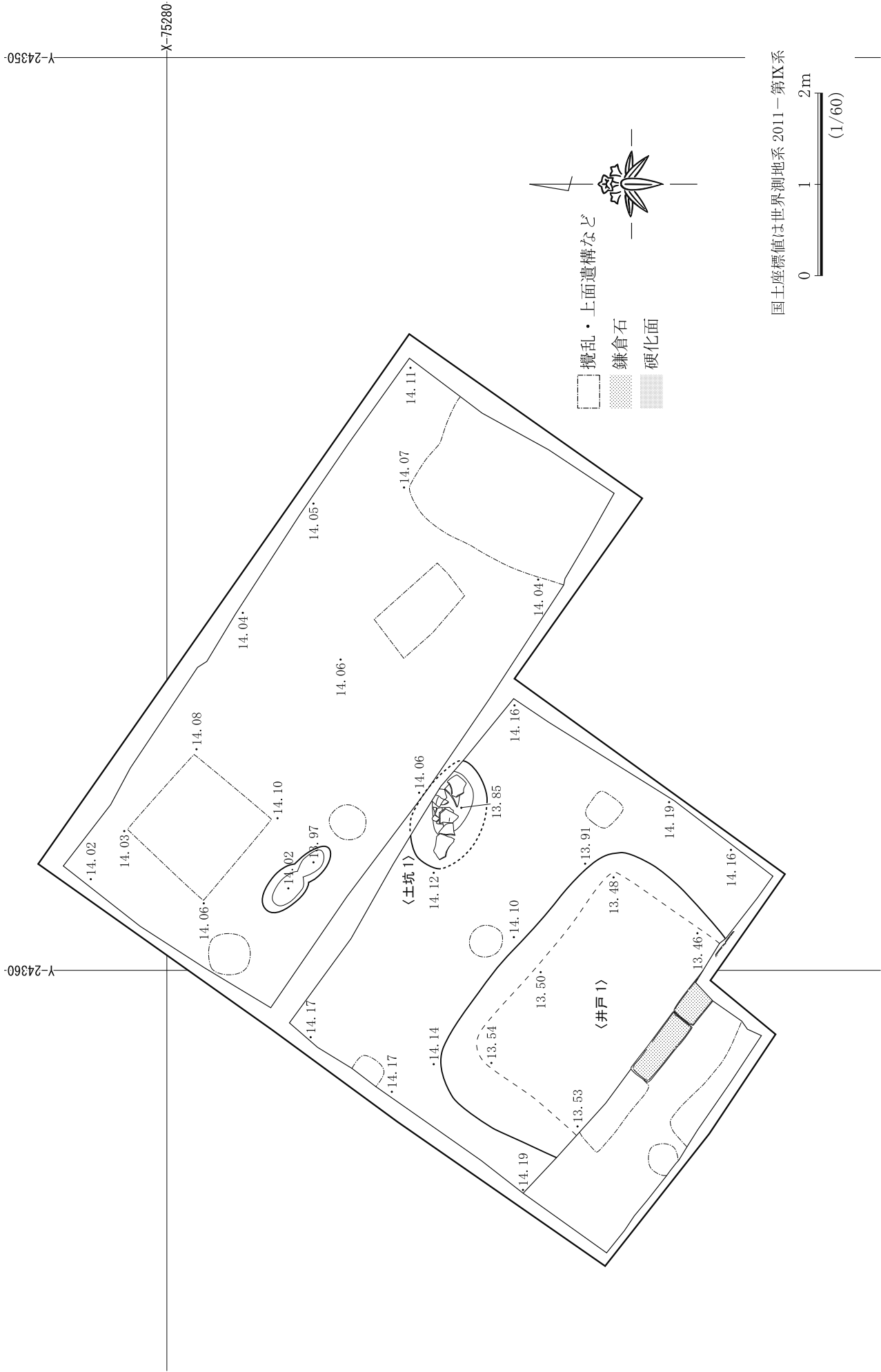
6面の井戸1は調査区の南西外に続くため全体規模は不明だが、大よそ一辺3.4mを前後の方形掘り方を呈し、概ね標高13.85m以下では岩盤を掘り込んで構築されていた。廃絶後は大型の泥岩ブロックを乱雑に投げ込んで埋め立てられており、この結果、先述のように上位遺構面の陥没を招いたことが想定される。埋土は確認面から70cm下の標高13.5m前後まで掘り下げたところで安全面への配慮から掘削を終えた。これより下位は、ピンポールを数ヶ所に刺したところ、さらに70cm以上の深さを測ることが確認された。掘削できたレベルまででは、痕跡も含めて杵材の存在は確認できなかった。

土坑1は6面より上位を掘り込み面とし、5b面には蓋をされる層位関係にあることから、6面の存続期間中、整地面の貼り増しなどに伴って構築されたと見られる。正確な平面規模は捉えられなかったが、長径120cm×短径80cm前後の楕円形プランを呈していたものと考えられる。掘り込み面は標高14.2m前後、底面標高は約13.85mを測る。土坑内には埋土に混じって破碎された常滑甕片が多く出土した。口縁～胴下部の1/3程度まで復元できたが、底部の破片は1点も採集できなかった（図13-48）。

(7) 6面下（図11）

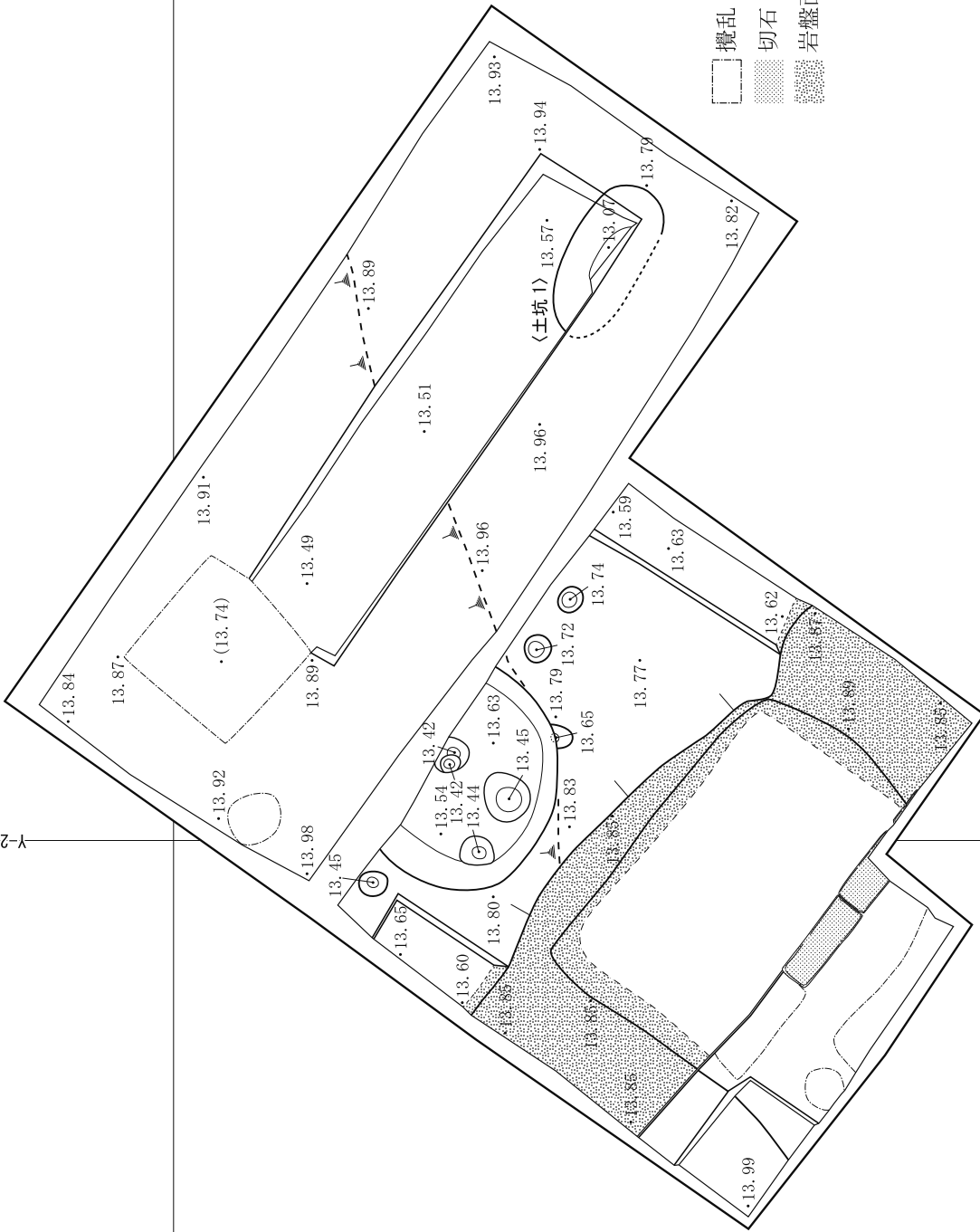
6面遺構の記録を取った後、さらに下層への掘り下げを進めたが明確な整地面は確認できなかった。Ⅱ区の南半部では標高13.85m前後で岩盤面が検出され、北に向けて急激に落ち込む状況が確認できた。Ⅰ区では部分的ながら土坑の底面となる13.07mまで掘り下げて見たものの岩盤面の検出には至らず、さらに下位に存在することが確認された。岩盤以北の堆積土は黄色系の砂質土と粘質土が混ざり合っており、一定レベルで平らに削ると、異なる性質の土が東西ラインを境に堆積している状況が認められた。Ⅰ区深掘りトレンチでの土層観察などの結果、こうした状況は北に向けて落ち込む斜面堆積によるものと判断した。岩盤面の落ち際には幾筋もの亀裂が入るものの掘削工具痕は認められなかったことから、落ち込みは人工の営為で成ったものではなく、地滑りなどの自然現象で形成されたものと考えられる。上記の斜面堆積も、谷戸上方からの土砂流入や水流による攪拌など度重なる自然作用を経て形成されたものであろう。堆積土中からは中世遺物の他、少量だが古墳時代にまで遡る土器片も出土している。

岩盤以北の6面下堆積土上で確認できた遺構として確実な例はⅠ区東部の土坑1のみで、Ⅱ区で表現



国土座標値は世界測地系 2011 - 第Ⅸ系
 0 1 2m
 (1/60)

図10 6面全体図



国土座標値は世界測地系 2011 - 第IX系

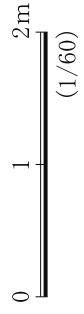


図11 6面下全体図

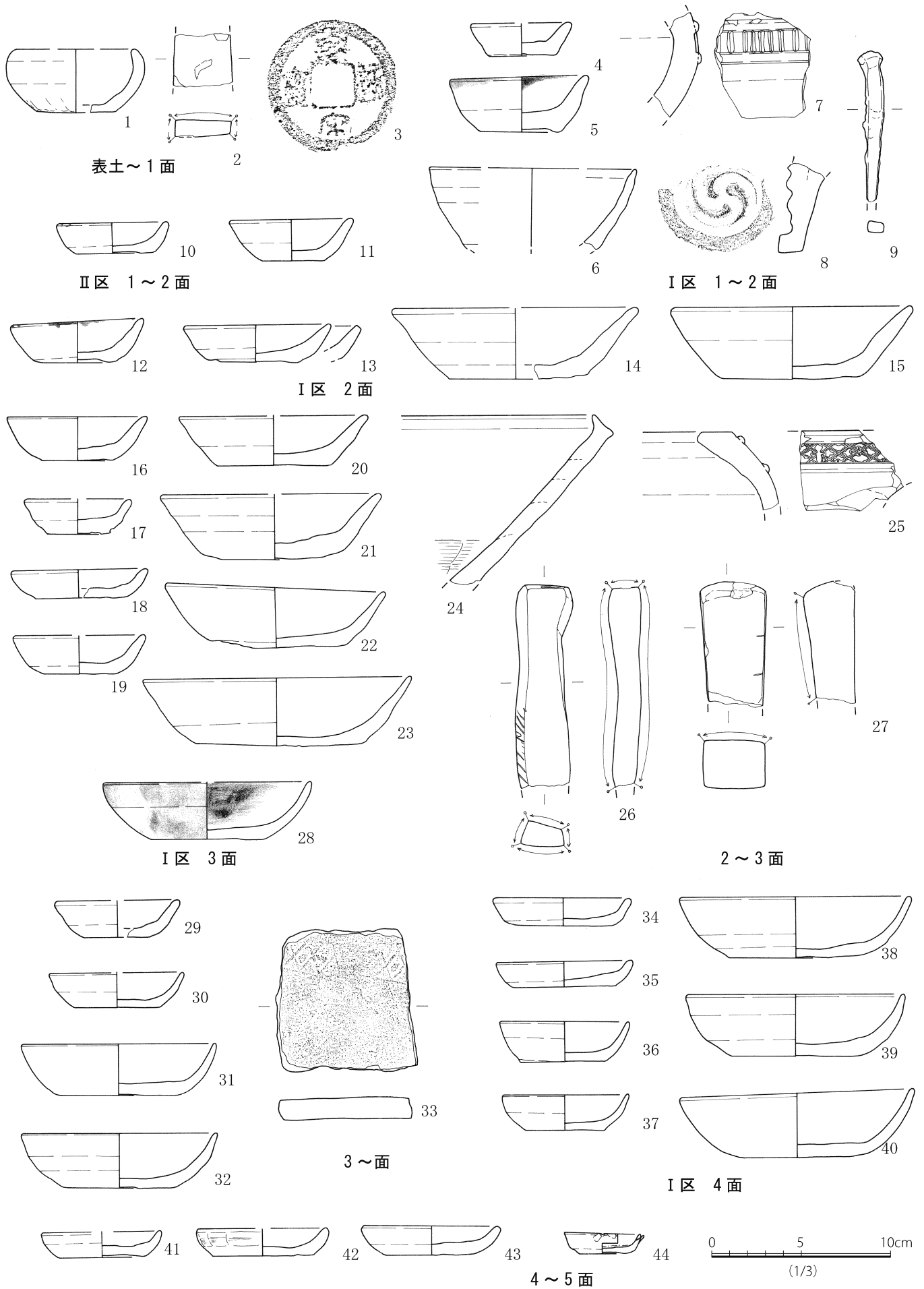


图 12 出土遺物 (1)

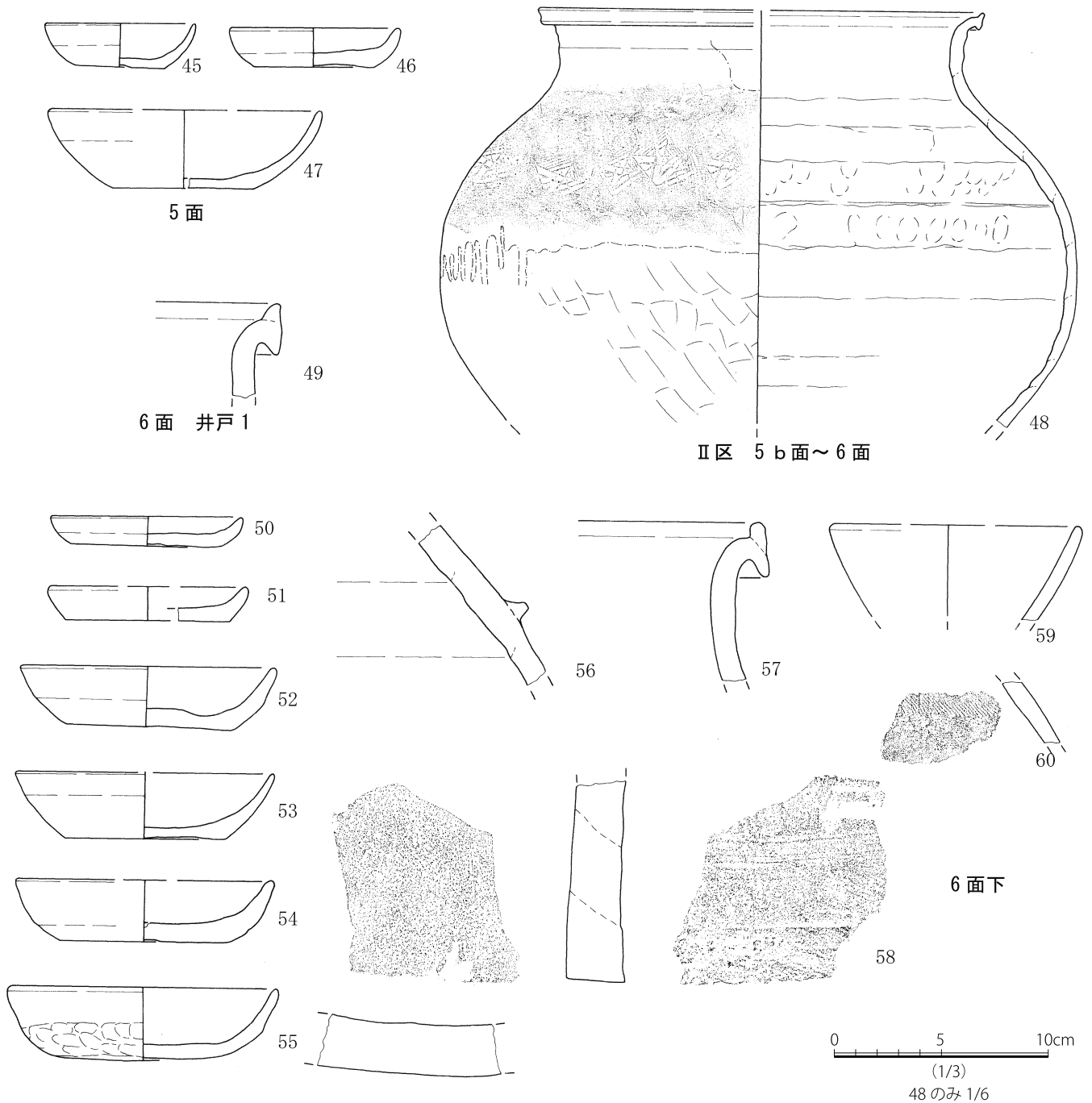


図 13 出土遺物 (2)

されている土坑や小ピットは、自然作用の堆積を誤って掘ってしまった可能性が高い。土坑 1 は長径 135 cm × 短径 60 cm、確認面からの深さは 80cm を測り、暗灰色粘質土を埋土とする。出土遺物はなかった。

第 2 節 出土遺物 (図 12・13、表 2・3)

図 12・13 には、上層から順に出土遺物を掲げた。各層位とも量的に主体となるのはロクロかわらけで、手づくねかわらけは上層遺構への混入品を除くと 5a 面より下位の層位より出土したが、数量としては僅少で、客体的といえる存在であった。以下、かわらけを中心に各遺構面の遺物様相を述べる。

1 面下では器壁が厚く身深で外反器形を取る。2 面でも厚手の資料が中心となるが、小皿に外反傾向が見られない点は 1 面下と異なる。14・15 の大皿は体部が直線的に外方に開くが、器形がシャープなためか重厚感を感じさせない。2 面下では厚手と比較的薄手の資料が混在する。両タイプともに大皿は体部下位に丸みを帯び、口縁部は外方に引き延ばして作られている。小皿も体部に丸みがあり、口縁部

表2 出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	法量 (cm)			残存率	重量 (g)	内底面調整		外底面圧痕		色調	出土遺構・胎土ほかの特徴
			口径	底径	器高			行	サリ状	板状	ス/コ状		
出土遺物(1)(図12)													
表土～1面													
1	土器	古式土師器 小型鉢	(6.7)	(4.4)	3.6	1/5						赤灰	砂粒多、内外面赤彩カ
2	石製品	砥石	長さ [3.0]	幅 3.2	厚さ 1.0	両端欠						暗灰	鳴滝産 仕上げ砥
3	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	完形	3					—	皇宋通寶(篆書) 中国北宋代 1038年初鑄
1～2面													
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(5.5)	(3.8)	1.9	1/2弱		○		○		橙	白針、雲母
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.3	3.2	3/4		○		○		黄灰	白針、雲母 口縁の一部黒色に変色
6	陶器	瀬戸 天目茶碗	(11.4)	—	[4.5]	口1/8						灰白	内外面鉄釉
7	瓦質土器	火鉢	—	—	[5.8]	体小片						灰白	V類カ 風炉の可能性あり
8	瓦	軒丸瓦 or軒棧瓦	瓦当径 7.0	—	—	瓦当面 2/3						灰	三巴文
9	鉄製品	釘	長さ [8.4]	幅 1.1	厚さ 0.7	下端欠損	18					—	
10	土器	ロクロ かわらけ・小	6.0	4.4	1.8	口一部 欠損	[30]	○		○		橙	白針、雲母 口縁の一部黒色に変色
11	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	3.5	2.3	ほぼ完形	46	○		○		黄灰	白針、雲母
12	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.3	2.5	ほぼ完形	56	○		○		黄灰	白針 口縁の一部黒色に変色
13	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.0	2.2	2/3		○		○		黄灰	白針、雲母 口縁外面に焼成前のケズリ痕
14	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.5)	(7.8)	4.0	1/3		○		○		橙	白針、雲母
15	土器	ロクロ かわらけ・大	13.3	7.7	4.2	ほぼ完形	229	○		○		橙	白針、雲母
2～3面													
16	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.0	2.5	3/4		○		○		橙	白針、雲母 外面の一部剥落
17	土器	ロクロ かわらけ・小	(5.8)	(3.5)	2.0	2/3		○		○		橙	白針、雲母
18	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.1	1.6	底一部 欠損		○				黄橙	白針、雲母
19	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.3)	4.0	2.2	1/3		○		○		橙	白針、雲母
20	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.5)	(6.2)	2.8	1/2弱		○		○		橙	白針、雲母
21	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	7.8	3.6	口3/4 欠		○		○		橙	白針、雲母
22	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	7.5	3.8	口一部 欠	145	○		○		橙	白針、雲母
23	土器	ロクロ かわらけ・大	14.9	9.4	3.9	3/4		○		○		黄橙	白針、雲母
24	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[9.3]	口小片						赤褐	砂粒、長石粒 内面やや磨耗
25	瓦質土器	風炉カ	—	—	[4.4]	口小片						灰白	口縁外面に横位の凸帯文が二 条、その間に花菱文スタンプ 体上部に弧状スリット
26	石製品	砥石	長さ [11.3]	幅 3.2	厚さ 1.8	下端欠						明灰	上野産 中砥カ 側面に刃物痕
27	石製品	砥石	長さ [6.8]	幅 3.7	厚さ 2.9	下端欠						明灰	上野産 中砥カ 側面に刃物痕(鋸引き痕カ)
3面													
28	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.5)	(6.3)	3.2	1/3		○		○		黄橙	白針、雲母 内外面黒色に変色(焦げ)
3～4面													
29	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.9)	(3.7)	2.1	1/2弱		○		○		橙	白針、雲母
30	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	4.8	2.0	1/3		○				黄橙	白針、雲母
31	土器	ロクロ かわらけ・中	10.2	6.7	2.9	1/2		○				黄橙	雲母
32	土器	ロクロ かわらけ・中	10.8	6.4	3.1	1/2		○		○		黄橙	白針、雲母
33	陶器	常滑 転用陶片	長さ 8.0	幅 7.6	厚さ 1.2	完形	122					褐	甕片を研磨具として整形カ 研磨具としての使用痕なし

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			残存率	重量 (g)	内底面調整		外底面圧痕		色調	出土遺構・ 胎土ほかの特徴
			口径	底径	器高			ナリ	ササ状	板状	スノ状		
4面													
34	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.6	1.6	完形	52	○		○		黄橙	白針、雲母
35	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.7	1.5	2/3		○		○		黄灰	4面土坑1 白針、雲母
36	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.8	2.3	ほぼ完形	47	○		○		黄灰	4面土坑1 白針、雲母
37	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.4	2.0	1/2		○		○		橙	4面土坑1 白針、雲母
38	土器	ロクロ かわらけ・大	12.8	7.5	3.5	完形	159	○		○		橙	白針、雲母
39	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	7.3	3.5	1/2		○		○		橙	白針、雲母
40	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	6.0	3.8	3/5		○				橙	白針、雲母
4面下													
41	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.6)	(4.7)	1.5	1/3		○		○		橙	白針、雲母
42	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.6)	1.6	2/5		○		○		黄橙	白針、雲母 外面に強いナデ
43	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.0	1.7	ほぼ完形	57	○				橙	白針、雲母
44	陶器	瀬戸 入子	4.3	2.6	1.2	完形	14	○				灰	小石粒含む 口縁内面に自然釉
出土遺物(2)(図13)													
5面													
45	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.2	2.2	1/2		○		○		橙	白針、雲母
46	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	1.9	1/2		○				黄橙	白針、雲母
47	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.7)	(6.6)	3.7	1/3		○		○		黄橙	白針、雲母
5～6面													
48	陶器	常滑 甕	(41.6)	—	(38.8)	上位 1/3						灰	5 b 面下土坑1 6 a 型式 砂粒、長石 肩部にスタンプ 上部内外面に自然釉
6面													
49	陶器	常滑 甕	—	—	[4.3]	口小片						灰	6面井戸1 砂粒、長石 内外面自然釉
6面下													
50	土器	ロクロ かわらけ・小	8.9	7.0	1.4	1/2		○		○		灰黄	白針、雲母
51	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.2)	(7.7)	1.6	1/4		○				橙	6面下土坑2 白針、雲母
52	土器	ロクロ かわらけ・大	11.9	7.8	3.0	ほぼ完形	162	○		○		黄橙	白針、雲母
53	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	7.5	3.1	口欠		○		○		橙	白針、雲母
54	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.9)	(7.8)	2.9	1/4		○		○		橙	白針、雲母
55	土器	手づくね かわらけ・大	12.4	—	3.4	3/4		○		○		黄灰	白針、雲母
56	陶器	常滑 突帯文付壺	—	—	[7.5]	胴小片						灰	砂粒、長石 外面自然釉
57	陶器	常滑 甕	—	—	[7.4]	口小片						灰	6a～6b 型式 砂粒、長石 内外面自然釉
58	瓦	平瓦	—	—	厚さ 2.2～ 2.8	狭端面 一部						灰	6面下土坑2 砂粒、白色粒 永福寺女瓦D類の一種カ 凸面板ナデ 凹面離れ砂
59	土器	土師器 埴カ	(11.6)	—	(4.4)	口小片						橙	粗砂多、角閃石
60	土器	弥生土器 壺	—	—	[3.0]	胴小片						橙	小礫粒 外面単節LR縄文 +ヘラミガキ、赤彩

を直線的ないし外方に立ち上げている。3面～5面では、身深で内湾器形の資料が主体となり、3面下の31・32は口径が10cm台で中皿といえる。3面の出土品としては28の1点のみを提示したが、2面下のかわらけとは器形の印象が明らかに異なる。6面下では大皿・小皿ともに低平な資料が主体となり、1点のみだが手づくね大皿も図示できた(55)。かわらけ以外の陶磁器類は少なく、年代特定の根拠は薄弱だが、常滑製品では2面下に9～10型式の片口鉢Ⅱ類(24)が、6面下に6型式の甕(57)があり、それぞれ15世紀代と13世紀後半頃という、大よその年代観を示している。

表3 出土遺物カウント・計量表

面・層位①

面・層位	土器(かわらけ)						白色土器		土器							
	ロクロ			手づくね			小片		鍔釜		燭台					
	大	小	不明	大	小											
表土～1面	59	753	5	47	118	513										
1面下	201	3142	32	434	196	852										
2面下	172	4585	55	568	518	2740	1	4	1	9	1	108				
3面下	215	2637	48	438	364	1245	1	2								
4面下	91	1162	27	206	188	691										
5a面下	51	428	14	136	79	230	1	10								
5b面下	35	355	3	19	175	421	2	11								
6面下	41	806	7	156	45	156	19	235	4	27						
帰属不明	41	518	7	97	6	19	1	10								
合計	906	14386	198	2101	1689	6867	23	266	4	27	2	6	1	9	1	108

面・層位	白磁				青白磁		龍泉窯系青磁									
	口禿皿 (IX類)	口禿碗 (IX類)	印花文皿 (X類)	碗・皿	碗・皿	蓮弁文碗 (II or III類)	蓮弁文碗 (II類)	劃花文碗 (I類)	折縁皿 (坏皿類)							
表土～1面						1	4									
1面下																
2面下		1	10		1	1			2	10						
3面下					1	1				16		1	5			
4面下	1	4		1	3			1	7	1	7					
5a面下										1	2					
5b面下	1	3			1	1										
6面下												1	10			
帰属不明								2	20							
合計	2	7	1	10	1	3	3	3	4	31	4	25	3	20	1	5

面・層位	瀬戸													
	卸皿	天目碗	折縁皿	直縁大皿	碗	入子	瓶類							
表土～1面					1	5								
1面下		1	26	2	31			1	2	1	23			
2面下	1	16		1	48	2	21							
3面下								3	33					
4面下								1	14					
5a面下								1	1					
5b面下														
6面下														
帰属不明														
合計	1	16	1	26	3	79	2	21	1	5	6	50	1	23

凡例：各器種とも左の数値は破片点数、右の斜体数値は重量(g)を表す。

面・層位	渥美・湖西		尾張・常滑											
	甕	甕	壺	山茶碗	片口鉢		転用片							
					I類	II類								
表土～1面			1	33										
1面下	4	405	6	325				1	68					
2面下			30	1585			1	17	5	279				
3面下			9	371					1	18	1	123		
4面下			7	166			1	14	1	33				
5a面下	1	26												
5b面下			42	2851			3	38						
6面下			28	2507	2	146	1	14	3	55				
帰属不明			3	147										
合計	5	431	126	7985	2	146	1	14	8	124	8	398	1	123

面・層位	瓦質土器							
	火鉢		火鉢Ⅱ類 (B類)		火鉢Ⅴ類 (E類)		火鉢Ⅵ類 (F類)	
表土～1面								
1面下	4	119	1	122			1	75
2面下	1	21			1	48		
3面下								
4面下								
5a面下								
5b面下								
6面下								
帰属不明							1	73
合計	5	140	1	122	1	48	2	148

面・層位	瓦																	
	平瓦								丸瓦						軒棧瓦カ			
	平瓦		A類		C類		F類		A類		B類		C類					
表土～1面																		
1面下																1	67	
2面下					1	382												
3面下																		
4面下																		
5a面下	1	10																
5b面下			1	165										1	142			
6面下			4	974	1	274	1	51	1	100	1	52	1	99	1	52		
帰属不明																		
合計	1	10	5	1139	2	656	1	51	1	100	1	52	2	241	2	119		

面・層位	銅製品		鉄製品		石製品			骨	貝	
	銭		釘		基石	砥石	上野産 中砥	獣骨	ウミナ	
表土～1面	1	3	1	8			1	19		
1面下			2	28						
2面下	1	3	1	11			1	90	1	125
3面下	1	1							1	
4面下					1	4				1
5a面下										
5b面下										
6面下	1	3								
帰属不明										
合計	4	10	4	47	1	4	1	90	2	144

面・層位	土師器						近代土器		近代陶器		ガラス			
	甕		壺		埴・鉢		不明		焜炉?	壺		瓶		
表土～1面					1	17				1	15	1	27	
1面下														
2面下														
3面下														
4面下	1	5												
5a面下	46	377												
5b面下	3	34	2	27	1	5	6	23						
6面下	6	146	6	97	2	42								
帰属不明									1	70				
合計	56	562	8	124	4	64	6	23	1	70	1	15	1	27

地区	面	遺構・層位	かわらけ													
			ロクロ						手づくね							
			大		小		不明		大		小		不明			
I	1面	攪乱	5	53	1	17	32	132								
I	2面	竪穴状遺構	51	920	20	253	71	247	2	22	1	7	2	7		
I	4面	面上	2	150	2	113										
I	4面	土坑1(井戸)	37	655	15	244	21	71								
I	4面	礎石A下ピット			4	9										
II	4面	P-3					4	10			1	1				
II	4面	集石	4	30			4	15								
II	5b面	溝1	1	7			3	7								
II	5b面	P-2	1	12			2	3								
II	5b面	P-8			1	32										
II	5b面	切石抜き取り穴					2	6								
II	5b~6面	土坑1			1	3										
II	6	井戸1	6	29	1	8	4	8								

地区	面	遺構・層位	青白磁		龍泉窯系青磁				尾張・常滑							
			水注		蓮弁文碗(Ⅲ類)		折縁皿(坏Ⅲ類)		碗・皿		甕		片口鉢			
													I類			
I	1面	攪乱														
I	2面	竪穴状遺構			1	5	2	8	1	3	3	242	1	29		
I	4面	面上														
I	4面	土坑1(井戸)	1	5							3	105				
I	4面	礎石A下ピット														
II	4面	P-3														
II	4面	集石									1	44				
II	5b面	溝1														
II	5b面	P-2														
II	5b面	P-8														
II	5b面	切石抜き取り穴														
II	5b~6面	土坑1									1	7960				
II	6	井戸1									4	315				

地区	面	遺構・層位	東濃		瓦質土器			瓦				
			山茶碗		火鉢		火鉢B(Ⅱ類)	平瓦	丸瓦			
								A類	A類			
I	1面	攪乱										
I	2面	竪穴状遺構			1	32	1	27	1	194	2	186
I	4面	面上										
I	4面	土坑1(井戸)	1	13								
I	4面	礎石A下ピット										
II	4面	P-3										
II	4面	集石										
II	5b面	溝1										
II	5b面	P-2										
II	5b面	P-8										
II	5b面	切石抜き取り穴										
II	5b~6面	土坑1										
II	6	井戸1										

地区	面	遺構・層位	鉄製品		石製品		土師器				骨	
			釘		滑石		甕		壺		獣骨	イルカ骨
						不明						
I	1面	攪乱										
I	2面	竪穴状遺構	1	14	1	26						
I	4面	面上										
I	4面	土坑1(井戸)	1	32			1	13			5	2
I	4面	礎石A下ビット							1	4		
II	4面	P-3					1	43				
II	4面	集石										
II	5b面	溝1										
II	5b面	P-2										
II	5b面	P-8										
II	5b面	切石抜き取り穴							1	12		
II	5b~6面	土坑1										
II	6	井戸1										

確認調査時

面・層位	土器(かわらけ)						青白磁	龍泉窯系青磁				土師器	
	ロクロ						碗・皿	蓮弁文碗 (II or III類)		蓮弁文碗 (II類)		甕	
	大	小	不明										
確認調査 1・2面下?	12	222	2	26	3	8				1	9		
確認調査 3面下?			5	41			1	1	3				
確認調査 6面下?												2 28	
合計	12	222	7	67	3	8	1	1	1	3	1	9	2 28

第五章 調査成果のまとめ

今回は 41 m²と狭小な範囲の調査となったが、大きく 6 枚の中世遺構面を確認でき、鎌倉～南北朝・室町時代における比較的整然とした土地利用の変遷を捉えることができた。以下、出土遺物から各面の年代観を考察しつつ、遺構変遷を振り返りたい。併せて、5a 面で検出された玉石敷き面についても、周辺調査での類例を参考としながら若干の検討を加えたい。

第 1 節 遺構の年代観と変遷

1 面は表土直下での検出となり、明確な遺構の確認には至らなかった。2 面では I 区東端部で竪穴状遺構を確認した。1 面と 2 面の構築は大型の泥岩ブロックを用いた乱雑な盛り土造成によって行われており、3 面の泥岩を隙間なく突き固めた丁寧な整地状況とは様相を異にしていた。出土遺物の面でも、2 面下と 3 面以下とはかわらけの器形が明らかに異なることから、両者間には土地の利用状況に一定の断絶があった可能性も想定できる。2 面と 2 面下出土のロクロかわらけは、大皿が外傾～外反器形を呈する資料が主体であり、小皿は身深で体部下位に丸みを帯びた器形が多い。資料数は少ないながらも、ともに上層に向かうにつれて器壁が厚くなる傾向が看取できる。大よそ、14 世紀後葉～15 世紀前半の様相と理解できよう。

3 面では調査区の西縁部で安山岩と凝灰岩切石が面上に据わっており、両石間は 220 cm の距離がある。これ以外は遺構が全く検出されなかったため両石の性格付けはできないが、調査区外の西と南に礎石列となって続いていたと仮定しても、先行する 4 面建物の軸線を踏襲していたものと見なせ不自然な印象は受けない。ただ、3 面～4 面の盛り土は比較的厚く、ここを土地利用上の画期とも見なし得るので、この間に継続性を見出すべきか、それとも多少の断絶があったと考えるべきか、両方の可能性を示して周辺調査成果の蓄積を待つことにしたい。ひとまず、上下遺構面との関係から、14 世紀中頃の年代を当てておく。

4 面では柱間スパンが 200 cm の掘立柱建物が検出され、同位置での礎石建物への造り替えが行われた可能性もある。掘立柱建物は 1 間×2 間以上の柱列として確認できたのみで、調査区外には如何ほどの規模で展開するのか定かでない。柱間のスパンから建物と考えたが、区画・遮蔽施設であった可能性もあり得る。他に、井戸と見なせる平面方形の筒形土坑が検出されている。3 面下～4 面の出土かわらけはロクロ成形品で占められ、身深で内湾する坏形の資料が主体となり大・中・小の三法量がある。小皿には坏形の外、低平な個体も含まれる。伴出する陶磁器が僅少であるため年代判定の根拠とすべき資料を欠いているが、上下の遺構面との関係から、14 世紀前葉頃を考えておきたい。

5 面は整地状況から 2 段階に区分でき、上層の 5a 面では II 区を中心に玉石敷き面が広がっていた。これに先行する 5b 面では、II 区で玉石敷きに被覆された 2 時期の切石列が検出され、I 区ではこれと直交方向に並ぶ切石列が 5a 面段階でも玉石敷きに覆われない形で残存していた。従って、5b～5a 面には時間的連続性を想定でき、II 区側では玉石敷きによる整地の更新が行われたものと理解している。玉石敷きを除去すると 5b 面の直上で薄い炭層の堆積が認められたので、近傍での火災が再整地の理由とも推測できる。両切石列は調査区南東外で L 字に屈曲する可能性があり、その場合には基壇状施設の南東角と見立てることができる。II 区切石列は西端部分が小規模な溝（溝 1）に切られ、これに沿って

切石列が延びていた痕跡（硬化面）も確認されている。また、溝1や硬化面を切るピットは建物または柱穴列に復元することも可能で、5b面から5a面へと続く間には、整地や区画施設の更新が頻繁に実施されたことを物語っている。

5b面下では常滑甕片を廃棄した土坑1基を、6面上ではⅡ区5b面の切石列の下位で平面3m四方に復元できる井戸1基が検出された。井戸は岩盤層を掘り抜いているが、この直ぐ北東側は岩盤面自体が急激に落ち込んでいるため検出できなかった。人為的開削ではなく、地滑りなど自然現象が成因と考えている。5面～6面下（岩盤上）の出土遺物は、常滑甕が5～6型式、かわらけはロクロ成形品が主体となる。ロクロかわらけは6面下では低平な大・小皿が主体だが、5面では身深の坏形も見受けられる。こうした様相から5～6面を13世紀後半～14世紀初頭と捉え、当地点での土地利用開始期と考えたい。

本地点は釈迦堂ヶ谷の開口部に立地し、第一章で触れた推定「田楽辻子」に接した位置に所在する。しかしながら、釈迦堂の創建年代（嘉禄元年＝1225）や『吾妻鏡』における「田楽辻子」の初見記事とされる13世紀前葉の生活痕跡を確認することはできず、13世紀後半という鎌倉時代後期に土地利用が活発化する様子が見て取れた。谷戸の開口部という立地条件にあり、調査区の北半部は岩盤層が急激に落ち込む不安定な土地柄であったことが、土地利用の後れに繋がったことも考えられる。釈迦堂ヶ谷での調査事例は限られているが、13世紀前半まで遡る遺構の検出例は僅少である。この時期、谷戸内の土地利用は安定した自然地形（平場）を選択した局所的なものであったのかもしれない。

第2節 5a面の玉石敷きについて

最後に、5a面で検出された玉石敷きについて再び触れておく。第一章でも述べたように、玉石敷きの類例は図1-地点5で13世紀中頃～後半の事例として確認でき（森2009）、地点1でも15世紀以降の玉石面に加え、平面的な広がり是不明確としながらも、さらに下位の層序にも玉石敷き面が存在すると報告されている（手塚・田畑1990）。また、遺跡地は公方屋敷跡になるが、この中の一地点（73㎡）でも13世紀中葉～後葉とされる5面において玉石敷きによる整地範囲が確認されている（熊谷2006）。本地点も含め、狭小な面積での確認であるため他の建物などとの関連性は明らかにし得ないが、丁寧な整地と比較的整然とした遺構配置が連綿と続く様は各地点ともに共通しており、およそ武家屋敷の一角と見なせる有り様である。鎌倉時代後期といえるこの時期、浄明寺地区では屋敷地の一面を玉石敷きで飾ることが一種の流行であったとも考えられよう。

鎌倉後期の上級武家屋敷跡として著名な今小路西遺跡（御成小学校地点）の北谷3B面でも、「奥座敷」とも評された礎石建物の南前面に玉石敷きの庭が広がっており、14世紀前葉の年代が付与されている（河野ほか1990）。同建物の火災層中からは他に類を見ない輸入陶磁器の優品が出土し、また玉石敷きの南東限界部には六角井戸が設えられるなど、年代や居住者の格式といった諸点で浄明寺一帯の事例と同列には扱えない。それでも、屋地内に玉石敷きを施すことが鎌倉の武家社会の中で一定のステータスシンボルであったと理解することは可能であろう。今回は極めて限られた範囲の発掘調査であったが、鎌倉後期における当地点の居住者像を考察するにあたり、参考となる知見が得られたといえよう。

参考文献（刊行年順）

- 手塚直樹・田畑佐和子 1990 『釈迦堂田楽辻子遺跡』 釈迦堂田楽辻子遺跡発掘調査団
- 熊谷 満 2006 「公方屋敷跡（No.268） 浄明寺四丁目 273 番地点」
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22（第 2 分冊）』 鎌倉市教育委員会
- 森 孝子 2009 「田楽辻子周辺遺跡の調査」 『第 19 回鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』
特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所



1. 現地調査前（北東から）



5. I区2面 全景（西から）



2. I区 表土掘削状況（北西から）



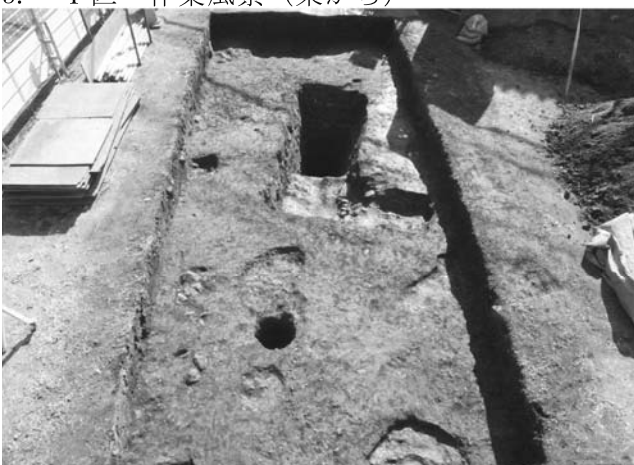
6. I区2面 南東隅遺物出土状況（北西から）



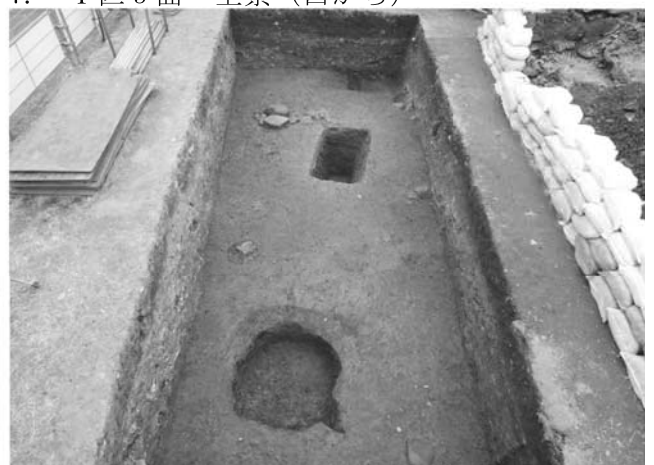
3. I区 作業風景（東から）



7. I区3面 全景（西から）

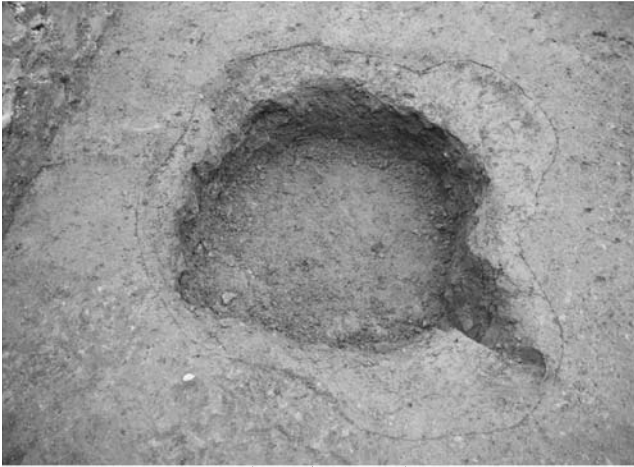


4. I区1面 全景（西から）

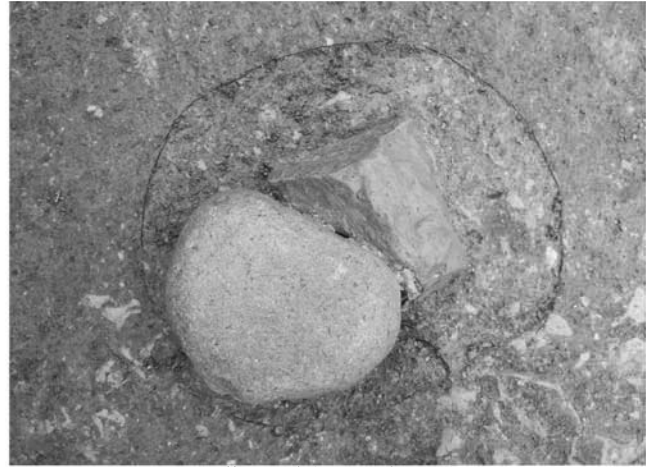


8. I区4面 全景（西から）

図版 2



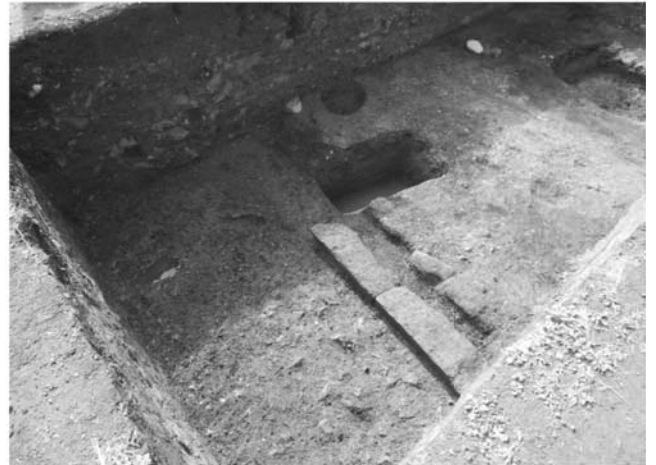
1. I区4面 土坑1 (西から)



5. I区5面 礎石 (東から)



2. I区4面 土坑1 断面 (南から)



6. I区5面 切石列 (北から)



3. I区4面 土坑1 (5面時、北から)



7. I区6面 全景 (西から)



4. I区5面 全景 (西から)



8. I区6面上 炭層範囲 (北から)



1. I区6面調査時 2面の落ち込み（北から）



5. I区南壁 土層断面（北東から）



2. I区6面下 全景（西から）



6. I区北壁 土層断面（南西から）



3. I区西壁 土層断面（東から）



7. I区北東隅 6面下遺物出土状況（南から）



4. I区東壁 土層断面（北西から）



8. I区6面下トレンチ東壁土層断面（西から）

図版 4



1. II区1面 全景 (西から)



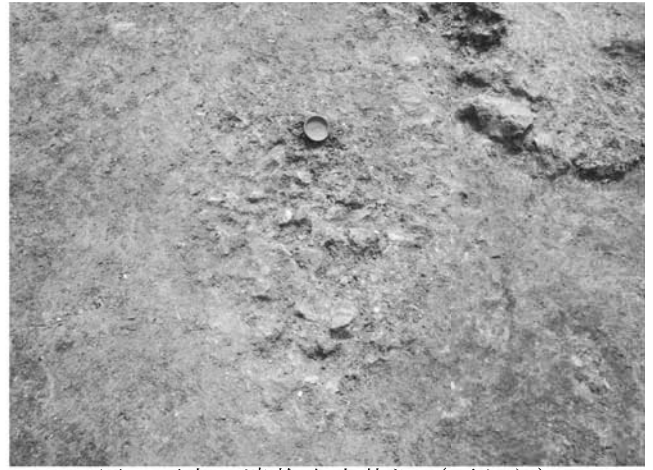
2. II区2面 全景 (西から)



3. II区3面 全景 (西から)



4. II区4面 全景 (検出時、西から)



5. II区4面上 遺物出土状況 (西から)



6. II区4面 全景 (割れ石等除去後、西から)



7. II区 作業風景 (南西から)



1. II区 5a面 全景 (西から)



2. II区 5a面 玉砂利敷き面 (北西から)



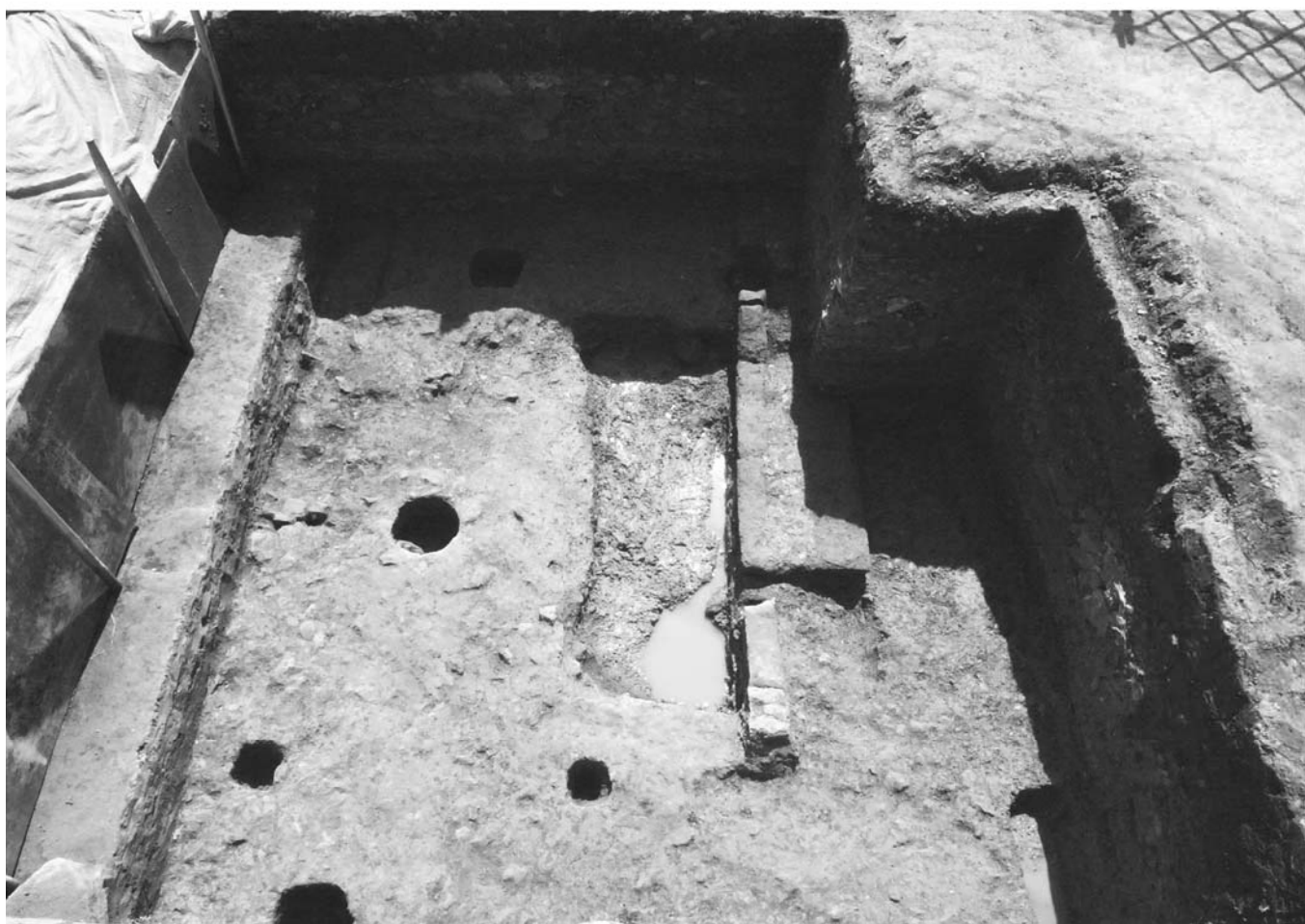
1. II区 5b面 全景 (炭層検出時、西から)



2. II区 5b面 全景 (西から)



1. II区 5a 面 柱穴列 (6 面調査時、北西から)



2. II区 6 面 全景 (西から)



1. II区 5b 面 北側切石列落ち込み状況 (6 面調査時、北から)



2. II区 6 面下 全景 (岩盤検出時、西から)



1. II区 5b 面下～6 面 土坑 1 常滑甕片
(南西から)



4. II区西壁 土層断面 (北東から)



2. 同上、土層断面 (南から)



5. II区東壁 土層断面 (西から)



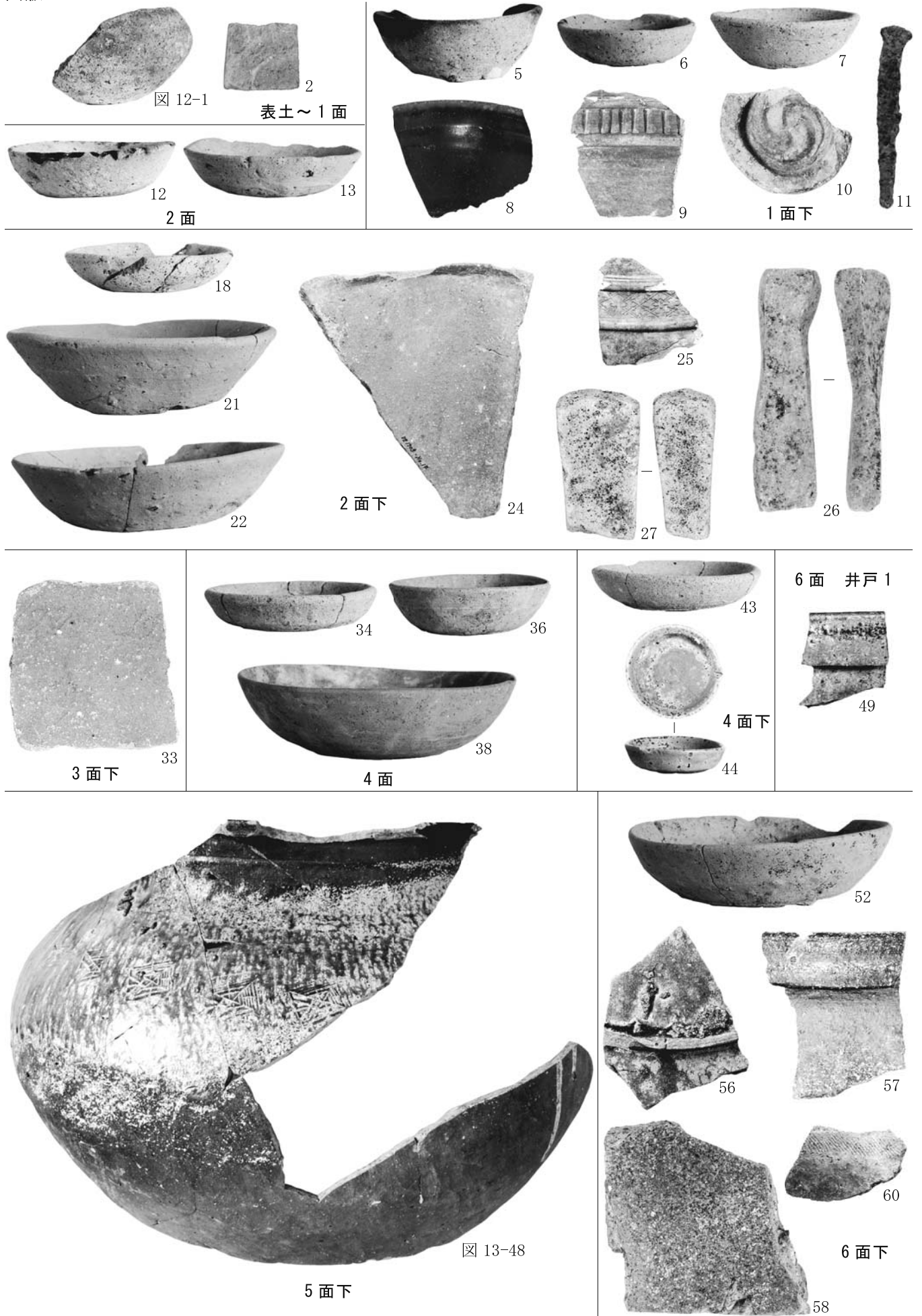
3. II区 6 面下 岩盤以北 (東から)



6. II区西部南壁 土層断面 (北から)



7. II区東部南壁 土層断面 (北から)



出土遺物 (縮尺=約 2/5)

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちようさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成30年度調査報告							
巻次	35 (第2分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	福田 誠/後藤 健/後藤 健/後藤 健/押木弘己							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦2019年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 大町三丁目 2354番1、6	14204	231	35° 18' 48"	139° 33' 24"	20100326 ～ 20100528	43.20	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
こまちおおじひがしいせき 小町大路東遺跡	神奈川県鎌倉市 大町一丁目 1147番	14204	233	35° 18' 59"	139° 33' 15"	20100326 ～ 20100528	70.00	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 160番17	14204	201	35° 19' 00"	139° 32' 40"	20100326 ～ 20100528	45.00	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 160番8、10	14204	201	35° 19' 00"	139° 32' 39"	20100326 ～ 20100528	49.00	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 浄明寺一丁目 590番2	14204	33	35° 19' 16"	139° 33' 55"	20110926 ～ 20111222	41.06	店舗併用 個人専用住宅 (鋼管杭工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	城館跡	中世・近現代	柱穴、土坑、井戸、切石列、溝状遺構	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品、金属製品、骨製品、石製品	近現代と13世紀後半～15世紀の生活面に柱穴等を確認。
こまちおおじひがしいせき 小町大路東遺跡	都市遺跡	中世	土坑、ピット、溝礎石建物、方形竪穴建物、井戸	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、瓦、木製品、石製品、金属製品、骨製品	13世紀前半～14世紀前半の生活面に方形竪穴建物や礎石建物を確認。
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	城館跡	中世	土坑、ピット、溝状遺構	土師器、かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品、金属製品、石製品	13世紀中頃～14世紀前半の土坑やピットを確認。人面を刻したかわらけが出土。
いまこうじにしいせき 今小路西遺跡	城館跡	中世・近現代	溝、土坑、ピット	土師器、須恵器、かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、瓦、木製品、金属製品、石製品	中世は13世紀中頃～14世紀後半の土坑、ピットを確認。かわらけ埋納遺構あり。
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	城館跡	中世	掘立柱建物、井戸、切石列、溝、土坑、ピット	弥生土器、土師器、かわらけ、国産陶器、瓦、木製品、金属製品、石製品	13世紀後半～15世紀前半の掘立柱建物、玉石敷きの整地や切石列を確認。

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 35

平成30年度発掘調査報告

(第2分冊)

発行日 平成31年3月29日

編集・発行 鎌倉市教育委員会

印刷 文一堂印刷株式会社